朝鮮史事

분류 390.851 등록 105741
번호 A538A 번호

저자명 朝鮮総督府
서명 朝鮮の年中行事

상태		대출	반납	반납
비상	김 종 社			

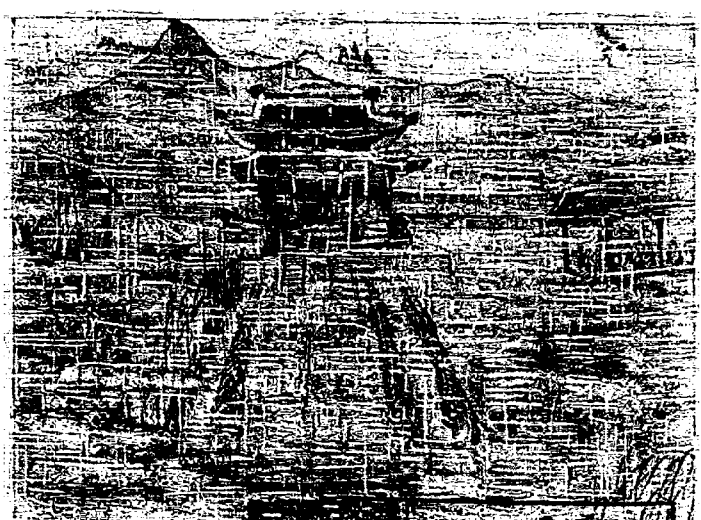
請求 105741 閲覧

書名

[illegible]
[illegible]

국회도서관
00105741

朝鮮の年中行事



受入番号	1019
分類番号	
圖書番号	

5 9

대한민국
국립도서관
1967 5 9
105741

朝鮮の年中行事

朝鮮總督府

序

本書は朝鮮に於ける風俗習慣の大要を平易に叙述したもので、説明を補ふ爲めに各種の挿繪をも加へてある。

昭和六年三月

朝鮮總督府

朝鮮の年中行事　目次

緒言……（一―三）
正月……（一）
元日……（一）
正朝茶禮――歳拜――新年朝禮――歳粧――歳饌と歳酒――ゾーリ懸け――鬼退け
柵戯……（一〇）
跳板戯……（一六）
地神踏み……（一八）
元日より十二日まで……（二〇）
上子日……（二〇）
上寅日……（二二）

上卯日……（二一）
上辰日……（二二）
上巳日……（二三）
立春日……（二四）
十四日……（二五）
福盗み——處容——豐凶豫驗
十五日……（三〇）
迎月——踏橋——ノツタリの遊び——上元の食物——洞神祭——野火戲——炬火戲——紙鳶の飛揚——獅子戲
索戰……（六四）
石戰……（四九）

二月

一日……（五二）

大掃除——食物——風神祭——濟州島の燃燈祭
六日……（五七）
九日……（五七）
驚蟄日……（五八）
上丁日……（五九）
二十日……（六〇）
清明日……（六〇）
寒食日……（六一）
薦氷……（六四）

三月……（六五）

三日……（六五）
生子の祈り……（六六）
穀雨日……（六七）

花柳の遊び……（六八）
閨氏戯……（七一）
柳笙……（七二）
青春敬老會……（七三）
四節遊宅……（七四）
鄕飲酒禮……（七四）
弓術會……（七六）
養蠶の始まり……（七七）
國師神祭……（七九）
餞春……（八〇）
蕩平菜……（八〇）
鐵餅及環餅……（八一）
四馬酒……（八一）

野菜賣り……（八一）
極樂の途迎へ……（八二）

四月……（八四）

八日……（八四）
蒸餅……（九一）
花煎と魚菜……（九一）
芹葱膾……（九二）
鳳仙花の指染……（九二）
熊山神祭……（九三）

五月……（九四）

五日……（九四）
菖蒲湯及び菖蒲酒——鞦韆戯——角戯——端午扇——天中赤符——戌衣日——艾及び益母草の採取——蠶樹を嫁すること——醍醐湯と玉樞

丹——烏金響祭——三將軍祭——宣威大王祭——城隍神祭——大嶺山神祭
太宗雨……(一二四)

六月

流頭日……(一二五)
流頭麵——水團と乾團——連餅
三伏……(一二九)
藥水飲み……(一二九)
避暑……(一三一)
鷄蔘湯……(一三一)
小麥麵……(一三二)
賜氷……(一三三)
農樂……(一三三)

七月……（一二七）
七日……（一二七）
十五日……（一二九）
草宴……（一三〇）
女子の協同績麻……（一三二）
八月……（一三四）
上丁日……（一三四）
十五日……（一三四）
茶禮及び省墓——角戲——龜戲——カン〳〵スオルレ戲——照里戲
牛まね戲
路上の會見……（一四一）
九月……（一四三）
九日……（一四三）

山遊び……(一四七)
二十九日……(一四八)
十月……(一五二)
三日……(一五二)
二十日……(一五四)
城主祭……(一五五)
農功祭……(一五六)
墓祭……(一五七)
漬物の調理……(一五八)
乾釘……(一六〇)
艾湯と艾團子……(一六一)
牛乳酪の製造……(一六一)
十一月……(一六二)

冬至日……（一六二）
赤小豆の粥――暦の頒賜と煎薬
黄柑製……（一六四）
十二月……（一六五）
一日……（一六五）
臘日……（一六五）
臘享――雀捕――臘日の雪――臘薬
大晦日……（一六七）
舊歳拜――守歳――驅儺
歳饌……（一七四）
牛禁を弛む……（一七五）
祠堂神祭……（一七五）
閏月……（一七六）

朝鮮の年中行事

朝鮮總督府囑託　吳　晴

緒　言

一國の文化とその民族性を知らむと欲せば、先づ風俗習慣を知らねばならぬ。人心趨向の標準となり、或は倫理道德の基準たるべき風俗習慣は、社會に於ける一大原動力である。世界何れの國といへども、各其の國の習俗には、國民祖先よりの傳統的精神が潛在してゐるからである。而して歷史的又は民族的背景を有する年中行事は、國民性の反映であつて、亦風俗習慣の表徵である。

蓋し年中行事の如きも、時代の變遷に伴ひ、多少の變化は免れないであらう。然しながら、その國に於ける民族的色彩は、必ず保有されてゐるのである。

朝鮮に於ける現代の習俗が、如何に古代からの傳統をひいてゐるか、又朝鮮人の民族性が、如何なる處にその特質を有つてゐるか、少くも此等の點に就いて、攻究する必要があらう。幾多の時代を閱し、古き歷史を有する朝鮮の習俗は、その種類

も廣汎であり、且つ朝鮮特有の習俗以外に、佛教・儒教等の外來文化によつて形成されたものも少くない。即ち佛教の遺風たる獅子戯の如き、儒教の遺風たる鄉飲酒禮の如きがそれである。のみならず、また地方に依つて、その樣式に小異はあるが、統一性を有する點に於て、興味深いものがある。此等の點については、斯界專門諸家の研究に待つべきものが多いのである。

この小冊子は、自分が數年間に、實査又は蒐集せる材料に基き、研究諸家の發表せられたる資料を參考して編纂したのであるが、只その大要を記述したるに過ぎない。若しこの小冊子が、幾分にても朝鮮の風俗習慣を知らむとする諸氏の參考ともならば、私の希望は達するのである。

終に臨み一言附記するが、朝鮮の年中行事は總て陰曆に依つて、行はれてゐるから、本書に於てもこれを標準とした。

대한민국국립
도서관장서

朝鮮の年中行事

吳　晴

正　月

元　日

正月は一年の始にして、又四時の首である故に、都會地に於ても、山間僻陬地に於ても、貧富貴賤を問はず、人々は各々その分に應じて、年首を壽き、あらゆる送舊迎新の樂みを盡すのである。その主なるものを記すれば、次の如くである。

一　正朝茶禮　元日の朝、各家では歲饌と歲酒をこゝのへ、家廟に供へて祭祀を行ふが、これを正朝茶禮と云ふ。而して家廟とは、祖先の神主、卽ち位牌を安置せる所にして、これ

には四代祖までの祖先、卽ち父母・祖父母・曾祖父母・高祖父母までの神主を安置することになつてゐる。それ故家廟に於ては、四代祖までの祖先を祭り、五代祖以上は神主をその墳墓の側に埋め家祭を廢するのである。ところが五代祖以上の祖先にしても、不薦位の祖先には何十代に至るまでも、その神主を永久に安置して、祭享を執り行ふのである。この不薦位とは、その神主を埋めず永久に安置し、以て祭るこの意味にして、名賢であるか、又は有名な功臣であるか、節臣であらざれば、不薦位の祖先にならなかつたのである。故にこれは家毎にあるものでない。

（正朝茶禮）

대한민국 국화
도서관 장서

二　歲　拜

元日の早朝歲粧をして、父母・祖父母・伯叔父母…等の尊屬親に拜み、新年の機嫌を伺ふのであるが、これを歲拜と云ふ。年長者は家に居て、子女や親戚又は其他の年少者からの年賀を受け、年少者は自分の家で禮を畢ると、近隣の親戚や其他の年長者を歷訪して歲拜をなし、これが畢てから、お互に友人を訪問して年賀をするのである。親戚又は舊知の年長者に對しては、三里・四里と離れてゐる地方に、わざ〳〵出かけて歲拜をするのである。年賀を受ける者は、一般の年賀者に對し、酒食を饗するのが例となつてゐるが、小供等には酒を饗せずして、小額の金錢又は餅や果物などを與へる。

而して新年の挨拶をするには、相手方の身分に應じて、色々な祝儀を述べるが、これにも身分又は長幼の別が嚴格である。例へば、

(1)　年長者又は身分の高きものに對しては、

新年を迎へて御機嫌ようございますか。

(2)　同年輩の友人間には、

侍奉して目出度く新年を迎へましたか。（侍奉とは父母に侍して尊奉するこの意であるか

ら、父母のない者には侍奉こいふ言葉を用ゐない）

喜びの夢を見たでせう。

新年は福を多く受けるでせう。

官職が陞られるでせう。

（3）年少者又は身分の低い者に者に對しては、

無事に新年を迎へたか。

新年に所願成就の

（拜　　歳）

夢を見たかね。

子息の出産の夢を見ただらう。

嬉しい夢を見ただらう。

新年は益々新家庭の生活が面白いだらう。

（4）子供に對しては、侍奉して過歳をよくしたか。

新年に命福を多く

대한민국 국회
도서관 장서

受けたか。

……と、述べるのである。

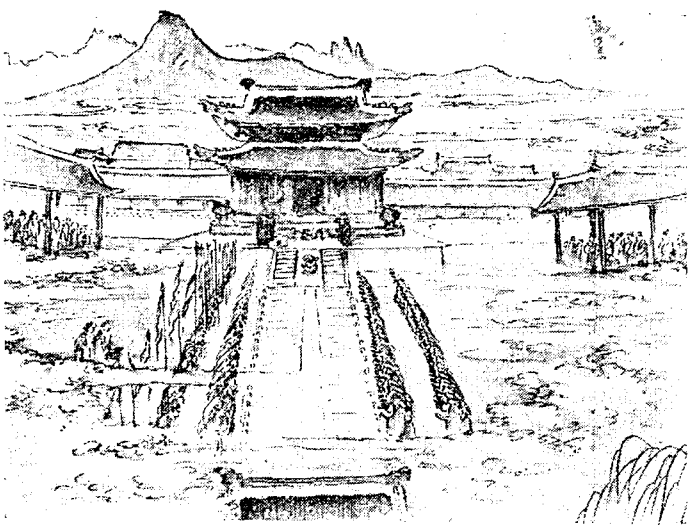
然るに常民階級に屬する者は、幾ら年長者といへども、自分の家で禮を畢てからは、先づ面識ある兩班階級の者を歷訪して歲拜をなし、それから同階級の年少者よりの年賀を受け、又は親戚及其他友人に廻禮をするのである。元來常民の兩班に對する歲拜は、室內に入らず、門外卽ち庭下に於て拜みをする。かゝる場合には、歲拜者は自分の名のみを呼んで「小人某新年問安を申上げます」といふ。年賀を受ける者は、何んとも答禮せないで、歲拜するのを見るだけである。しかしこの風俗は、時代の變遷に從つて、近來漸次改められつゝある。

喪中の人と女子は、年賀廻りに出歩かないが、中流以上の婦人どもは、三日より十日に至るまでの間に、問安婢といふ仲働きの女中を盛粧せしめ、お互にこれを遣はして、新年の挨拶を述べさせるのである。

三　新年朝禮　この日、議政大臣（首相）は、自分の家で朝早く禮を畢り、百官を率ひて宮中に參內して、新年の問安をなし、外官は箋文を奉つて賀意を表するのであつた。又正三

品以下の文官は、五言或は七言絶句の延祥詩を製進したが、これを弘文館提學に命じて選定せしめ、當選されたものを立春の日に、宮中の各殿の柱又は門の楣に貼り付けたのである。然しこれらの風俗は、既に過去のことゝなつてしまつたので、今は夢にも見られぬやうになつた。

四　歳　粧　元日には貧富貴賤や男女老幼こいはず、悉く早起し、洗面の上、各其程度に依りて新しい衣服に着換へるのである。俗にこれを歳粧――朝鮮語でソールビム（설빔



（新　年　朝　禮）

SulBim)――と云ふ。

五　歳饌と歳酒　元日の食物は、貧富貴賤に依つて一樣ではないが、一般に於て餅湯（떡국―Dukkuk―）といふものだけは必ず用意する。これは白餅といふ粳米の餅に饅頭などを交じて煮たものであるが、日本のお雜煮のやうなものである。この外に糯米の餅を搗き、幅一寸・長さ三寸位るの長方形に切つて、大豆又は小豆の粉を振りかける。これらの餅を元日に食ふのは、新羅時代からのことである。お正月の食物を總稱して歳饌と云ひ、特に酒は歳酒と稱へるが、元日に限り冷酒である。

六　ゾーリ懸け　元日の早朝又はその前日にゾーリといふ竹で編んだ柄杓形の笊を買ひ、これを戸口の上又は壁に懸けて置く風習がある。このゾーリを俗に福ゾーリといつてゐる。京城その他の都會地では、笊の商人などがこれを賣るが爲に、元日の前夜から「福ゾーリ買ひなさい」といひながら、夜が明けるまで街路を歩き廻るのである。全羅道地方に於ては、元日に竹箒と笊を買ひ置き、十五日の朝にこれを束ねて戸口の上に懸ける。これは幸運を招く一種の行事であつて、竹箒は柴草をかき集める道具であり、ゾーリは米穀などを掬ひ上げ

る道具であるから、その年の幸福をかき集めて掬ひ取るといふ意味から出たのである。かやうに懸け置いた竹笥(カルキ)や笊(ゾリ)は、正月末日になると、これを下ろして使用する。一年の幸福を招く爲めに、買ひ求めたカルキやゾーリは、その使用中に於ても、なるだけ心を盡して、その始末に注意し、出來得る限り、その年一杯使ふやうに努めるのである。それはその一年間の幸福を掬んでる樣とする心持からである。これは一の迷信的習俗に過ぎないものではあるが、この一事から推しても、朝鮮人一般の心理が、如何に永續性の實在であるかを推察することが出來るであらう。

（け懸リーゾ）

七　鬼退け

又元日の夜は夜光(ヤクワン)こいふ鬼が、天から降りて來て、方々へ歩きまわりながら、人家に忍び入り、人々の履物をはいて見て、丁度似合ふ履物があれば、それをはいて往く、こいふ傳説が全般的に信ぜられてゐる。若しもその履物を盗まれた人は、その一年中惡運で、何事を經營しても意の如くならないのみならず、反つて恐ろしい災厄に出遭ふこいふので、人々はこの鬼に履物を取られぬやうに努めるのである。

（鬼退け）

その方法が「鬼よけ」であつて、先づクムズル(合巻)こいふ左綯ひの縄を戸口に渡して鬼の入來を防ぎ、家の内では履物を全部室内に納め、鬼の目につかないやうにし、元日の夜は早く燈火を消して

就寢する。思ふに元日は一般に早起するから、早く寢かすやうにする爲めの方策から出でたのではなからうか。而して京都雜志元日の部「夜光鬼」の條に依れば、

鬼名夜光、夜入人家、喜偷鞋、鞋主不吉、小兒畏之、藏鞋滅燈早宿、廳壁上懸篩、夜光計其孔不盡、雞鳴乃去云、或言、夜光者癘鬼也、當日癘光癘與夜東語相近也、按此說非也、夜光卽藥王之音轉也、藥王像醜故、怖兒使之早宿。

と記されてゐる。

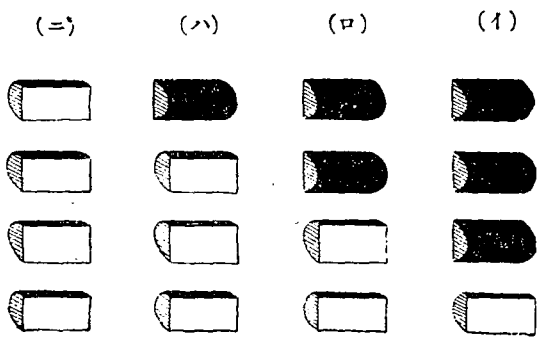
栖戲

元日は茶禮とか歲拜とか云つて、喜びの裡にこれを送り、二日以後からは凡ゆる遊樂氣分に浸される。正月の遊戲としては色々あるが、栖戲は娛樂として、最も新正の情趣を持つ特殊なものである。これは一に擲栖とも云ひ、年末から年始にかけて、貧富貴賤や男女老幼といはず、一般的に行はれるが、朝鮮語で之をユツノリ（윷놀이—yutnori—卽ちユツは栖、ノリは戲の意である）と云ふ。ユツ（栖）は主として、檀木又は萩その他堅木を以て製作する

が、斫栖（朝鮮語で장작윷（チャンチャクユッ）—Chang chak yut—又は채윷（チエユッ）—Chai yut—と云ふ）と栗栖（밤윷（バムユッ）—Bam yut—と云ふ）の二種がある。即ち斫栖とは長さ四寸・徑七八分位の圓い二本の棒を縱に割つて四本とし、その兩端を稍や細く削つたものであり、栗栖とは長さ六分・徑四分位のものであつて、斫栖に比べて頗る小さいが、縱に割つて四個一組とすることは彼是同樣である。然るにこの栗栖は、多くは賭博用として農夫間に行はれ、正月の遊戯用として一般的には行はれてゐない。

栖戯は二人以上は何人までも行ふことが出來るが、多くは二人以上の偶數が二組に分れて各組より一人づつ出で相手となつて行ふのが普通である。先づこれが計算方をいへば、四つの栖を手にして二三尺ばかり高く擲げ、それが場面に落ちて變化する俯仰により、これを計算する。かくして栖を場面に投げると、その俯仰に依り五種の變化がある。即ち三俯一仰・二俯二仰・一俯三仰・四仰・四俯であるが、これには固有の名詞があつて、三俯一仰を徒・二俯二仰を開・一俯三仰を杰・四仰を流・四俯を牟といふのである。そして徒は一圈・開は二圈・杰は三圈・流は四圈・牟は五圈を進み得る定めである。假令ば左に圖を以て示した通り

である。（この圖は研栖を示したものであるが、栗栖もその方法は同様である。）

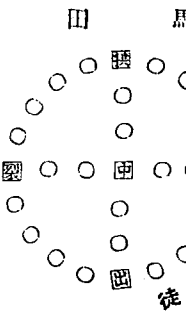


（ホ）

（イ）を徒（도 —to—）といふて一つに算する。
（ロ）を開（개 —kai—）といふて二つに算する。
（ハ）を杰（걸 —kul—）といふて三つに算する。
（ニ）を流（륭 —Ryut—）といふて四つに算する。
（ホ）を牟（모 —mo—）といふて五つに算する。

栖戯をするには、馬田といふものを要する。これは圍碁のとき、碁盤を要するのと同樣であるが、左に示した圖の如きものを馬田と云ふ。而して栖戯の競技法を簡單に述べると、最初爭頭しながら順番を定め小石又は物品などを馬とし、四個の栖を場面に投げ、その俯仰により現はれた前記の徒・開・杰・流・牟の點數に依り、出發の基點たる徒の處から最終點たる出の處に向つて右進せしめる。そこで次番の者栖を投げて、同じく馬を前進せしめて之を

追及するのである。若し後より進むものが追及して、前進したものゝ駐所に至ることになるこ、前進の馬を捕へる定めであるから、捕へられた前進のものは、更に出發の基點に戻り、新たに出發して追及することゝなるのである。而して前進中入又は拱の所に駐れるときは、左折して内部に向つて進行する。又入の所から内部に進行するものが、中の處に駐れば、更



に左折して出の所に向つて直行するのである。若し中の處に駐まらずして通過する場合には、直線に進み裂の所を經て外線により、出の所に向つて進行する。又一方入の處を通過すれば、外廓の拱の所に向つて進み、拱の所で駐つたならば出に向つて直下するが、然らざれば裂の所を經て出の所に當るから、甚だしい迂廻こなる。かゝる方法にて、最終點たる出の所までを、先きに四巡せるものを勝こするのである。而して梱を投げて、若し四仰の流・又は四俯の牢になるときは、同一人が何回でも繼續して梱を投げ、馬を進める事が出來る定めである。だから梱の投げ方こ馬田の運用方に依つては、相手方は一回も巡ら

ない内に四巡することもある。

柶（ユツ）は朝鮮獨特の遊戯にして、その起源甚だ古く、而も大衆的なものであるが、尙又簡素にして快活であり、且つ競技强烈で、實に朝鮮の民性に適した好個の民衆的遊戯である。室内の遊戯としては、感興を起さしめる點に於て、又運動ともなる點に於て、現今に流行する麻雀や撞球等よりは、尤も優越なものゝ云つても過言ではなからう。

柶（戯）

（こゝには紙面の都合上、柶戯に關する文獻を列擧しないが、金文豹の柶圖說・沈翼雲の柶戯經・李瀷の星李芝峰類說（第十八卷の技藝部）雜技の條・五洲衍文長箋（第十卷）柶戯變證說・李瀷の星

湖僅說類選卷之五技藝門雜戲の條……等を參照されんことを望む。)

跳板戲

これは女子の新正の遊戲として、都鄉貴賤を通じて盛んに行はれるものである。藁又はカマスなどを枕とし、その上に長さ七尺・幅一尺八寸位の板を載せて、板の兩端に一人づつ立つて、ハヅミをつけながら、交互に跳ね揚がるのであるが、これを朝鮮語でノルデイキ（널뛰기 —nul duiki—）と云ふ。若い女子が色彩華かな美しい服裝で、新春の寒空に飜るその遊び振りは、實に一幅の畫である。世人は朝鮮の女子を、單に蟄居して柔弱な生活を爲すものとしか、思つてゐないやうであるが、それは儒敎生活の一面のみを見て、朝鮮固有の女俗を閑却するからである。

跳板戲は、上古から傳つてゐる朝鮮特有の習俗にして、行動の活潑・精神の壯快・身體の輕捷・筋肉の彈强等に、特殊な意義を持つてゐるものである。儒敎思想の盛んなりし近代朝鮮に於ては、到底容認されない惡俗とも云ふべきものであつたが、元來久風大俗であるか

ら、幾多の時代を閲したるに拘らず、今日に至るまで依然として、民俗的生命を保有し、且つ民俗中に強靱なる力を持續してゐる。この一事から推しても、一國一民族の根深い習俗は、如何に外來思想の暴威に蹂躙されても、決して消滅されるものではない。

（跳板）

然るに南海の孤島琉球國にも、亦これと全く同樣なものが、板舞といふ名稱にて行はれてゐたといふ。清乾隆五十七年に冊封使として、琉球に往つた徐葆光の中山傳信錄に「正月十六日、男婦俱拜墓、女子於歲初、擊毬爲戲、又有板舞戲、橫巨板於木樁上、兩頭下空二三尺許、二子對立板上、一起一落、就勢躍起五六尺許、不傾跌欹側也。」……とあ

る。これが卽ちそれである。この文は周煌の琉球國志略に引用されて、昔日より學者の注意を引くところであつた。柳得恭の京都雜誌元日の部に、

閭巷婦女、用白板、橫駕藁枕上、分立兩端、激盪而跳數尺許、環珮琤然、以困頓爲樂、號爲超板戱、按周煌琉球國記略、其婦女舞於板上曰板舞、與此相類、國初琉球入朝、抑或慕而効之者歟。……

と記されてゐるが、これに依れば、琉球の板舞は朝鮮のノルテイキ(跳板)を模倣したものらしい。高麗朝の末葉から李朝の成宗時代までは、琉球よりの來朝使節絶へず、又一方には漂到の人船も絶へなかつたのであるから、板舞も此等に依つて傳はれたものであらう。

地神踏み

これは一種の假裝行列といふべきもので、正初慶尙南北道地方の農民間に行はれる遊びである。この地神踏みに最も重要なる役割を努めるものは、四大夫・八大夫・狩夫といふものであるが、四大夫・八大夫は大きな冠に長い煙管を啣へて、如何にも大儀さうに足並重く、

一番先頭に立ち、その後に狩袋に死んだ雉を入れて木製の鐵砲を擔いだ狩夫が、つゞいて色々な假面を裝ふた人々に推されながら、盛んに樂器を打ち鳴らしつゝ富豪の家を順次に訪ふて、地神を踏んでやるのである。地神を踏むときには、口では

「よい〳〵地神さまよ、雜鬼雜神は遠くへ去り、千幸萬福はこちらへ來い――」

といひながら踏んで歩くのである。これは文字の通りに解釋すれば、地の神を鎭めて、年中の無事を祈るといふ意味であるらしい。然るにこのやうに地神を踏んで貰つた家では、必ず金錢穀類等を出し

（地神踏み）

て、彼等に謝意を表するのであるが、かくの如くして集められた金品は、その部落の共同事

業に使用することになつてゐる。

元日より十二日まで

元日より十二日に至るまでは、干支の名を稱する風習がある。例を擧げていへば、子の日を鼠の日、丑の日を牛の日、寅の日を虎の日、卯の日を兎の日、辰の日を龍の日、巳の日を蛇の日、午の日を馬の日、未の日を羊の日（又は蚓の日ともいふ）、申の日を猿の日、酉の日を鷄の日、戌の日を犬の日、亥の日を豚の日といふ。右十二支の動物中の鼠・虎・兎・牛・馬・羊等の如き毛あるものゝ日をトルナル「털날」(tul nal) 卽ち有毛日といひ、龍・蛇の如き毛のなきものゝ日を無毛日といふ。而して元日が有毛日卽ちトルナルならば、その年には豐年で、五穀がよく穰り、且つ木綿が豐作であり、若しも無毛日ならば、凶年で木綿も凶作であるとの傳說がある。

上子日

これは正月の一番初めの子の日で、この日には鼠火鼓といふて、農民は爭つて田野に出て野原を燒くのである。かくの如くすれば、その年には野草が繁茂するといふ。又この日、子の時に舂を搗けば、鼠の種がなくなるといふて、夜十二時過頃空ら臼を搗くのである。これは昔日宮中に於て小官等が炬に火を付けて、「鼠燻し々々々」と大聲にて誦じながら、庭内を曳摺り廻した後、王樣から、煎つた穀物を入れた袋を下賜されたことから、民間に傳はつたものである。

上寅日

これは正月の初めの寅の日で、此日には人と交通をしないのみならず、女子は外出しないことがある。それは若しも他人の所に往つて大小便をすれば、その家人の中誰か虎に咬まれるとの傳說があるからである。

上卯日

正月の最初の卯の日で、此日には男女を問はず、命絲といつて約一尺ばかりの青色の絹絲を腕に纏ひ、又は冀纓に佩ひ、或は胸部に懸け、又は扉の鐵環の所に括り付けるのである。これは長い絲の如く、壽命の長からんことを壽くのである。又此の日には主人が先きに起き出てゝ門を開けた後、女子が室の外に出ることがある。この主人とは男子を意味するものであつて、必ずしもその家の長（戸主）が先きに門を開けるといふのではない。戸主でなくとも、家族の中誰か男子が先きに起きて門を開けてから、女子が室外に出るとの意である。此日女子が先きに門外に出づれば、その年の家運が不吉だとの迷信からである。

上辰日

正月の一番初めの辰の日で、此日一般農家の婦人達は早く起き、先を爭つて井戸の水を汲むべく急ぐのである。それは天上に棲んでゐる龍が、この日の午前一時頃、人間界に降りて來て、井戸の中に潜み入り、卵を產みつけると言ふ傳說から、その卵を產みつけた井戸の水を、誰よりも先きに汲んで來て御飯を炊けば、その年の農運が非常によいと云はれてゐるか

らである。而して井戸の水を一番先きに汲んで往つた者は、それを人に知らせるが爲めに、藁を少し井戸の中に浮べて置く。卽ち龍の卵はもう汲取られたことを知らせる意味である。この慣習は忠淸道地方に最も盛んに行はれてゐる。

上巳日

正月の第一番目の巳の日で、この日に若しも理髮をすれば、蛇が家内に入ることふて、男女を問はず、此日には、理髮をしない風習がある。それは蛇を非常に嫌ふからである。蛇は最執念深くたゝるものとされてゐるから、蛇を殺したときは、必ずこれを燒きて灰燼にするのである。

（上辰日の龍卵汲み）

立春の日

此日は千歳暦に定められてゐる日で、時には十二月になることもあるが、都鄙を問はず何れの家に於ても、門の板戸又は柱・梁等に、吉意の文句を大書して貼り付けるのである。これは支那から傳はつた風習であるが、その文句は例へば次の如き類である。

立春大吉、建陽多慶。　國泰民安、家給人足。

箕疇五福、華封三祝。　雨順風調、時和年豐。

愛君希道泰、憂國願年豐。　鳳鳴南山月、麟有北岳風。

掃地黃金出、開門萬福來。　國有風雲慶、家無桂玉愁。

災逐春雪消、福從夏雲起。　新意春初草、生色雨後花。

父母千年壽、子孫萬世榮。　北堂萱草綠、南極壽星明。

天上三陽近、人間五福來。　天下泰平春、四方無一事。

壽如山、富如海。　去千災、來萬福。　龍躍、鳳舞。

千增歲月人增壽、春滿乾坤福滿家。應天上之三光、備人間之五福。
門迎春夏秋冬福、戶納東西南北財。
壽福祿三星並耀、天地人一體同春。

十四日

一　福盜み　正月十四日を俗に小望日といふ。此日の朝、道路の土を採り來りそれを自分の家の四隅及厨に撒く風俗が殆んど全朝鮮的に行はれてゐる。これは道路の土は多數の人の踏んだ土であつて、多くの人の福の跡が宿つてゐるといふ觀念からであるらしい。然るに京畿道の一帶に於ては、この日の夜になれば貧しい人々が富豪の家に忍び入り、その家族が眠りについた頃をねらつて

（福盜み）

門口の土を盗み來り、翌朝これを自分の家の厨（炊事場）に撒く風習がある。これは富豪の家の土を盗んで來て、自分の家の厨に撒けば、その年の中に、よい運が到來して、その土を盗まれた家と同じく、富者になりあがることが出來る、といふ迷信的から出でたるものであるが、これに伴つて富者の家では、又自分の家の土を若しも人に盗まれたならば、福が滅るといふて、この日夕頃から出來得る限り、土を盗まれないやうに注意するのである。

二　處　容　これは厄拂ひの方法として、古へより都鄉共に行はれてゐる習俗である。即ち家人中に厄年に當る者居る時は、正月十四日の夜に、處容（朝鮮語で처용—chu yong—）と云ふて、藁草にて人形を作り、その頭・腹・脚……何れかの中に若干の銅錢又は白米を入れて、辻又は橋の附近に捨てる。或はこの日薄暮の時分に、乞食のやうな下流社會の子供達が、六七人づゝ群をなして、家毎に尋ねて往き、處容の有無を問ふが、そのとき持つてゐる家では、これを門外に投げ出すのである。されば群童は爭ふて之を取り、或は頭・或は腹・或は脚を勝手に毀破して、その中にある錢を採り出すのである。然るにその厄年に當る歳とは、男子にありては、十一・二十・二十九・三十八・四十七・五十六歳を厄年とし、女子に

ありては、十・十九・二十八・三十七・四十六・五十五歳を厄年としてゐるが、俗に之を直星ある年と云ふ。

而してその由來は、新羅第四十九代憲康大王時代の處容郎のことから、始まつたものである。これに就ては、三國遺事第二の處容郎條に左の如く記されてゐる。

「第四十九憲康大王の時代は、京師より四海の内に至る迄、家屋が櫛比して草屋は一軒もなかつた。笙歌は道路に絶へず、四季の風雨はよく調和されて年事豐富であつた。大王は開雲浦(蔚州)に遊んで歸る途次、汀邊に於て暫く休んでゐると、雲霧が忽ち周圍を掩ふて路を迷ふ程になつたので王は怪んで左右の人に問ふたが、日官奏するに「此れは東海龍の所爲であるから、敬意を表して解除を求めねばならぬ」と云つた。王は龍の爲め近い處に寺を建てることを定めたが、その勅令が出ると同時に、雲霧は忽ち散つてしまつた。仍つて開雲浦と名づけた。東海の龍は喜んで、七人の子を率ゐて、御前に現はれ、聖德を讃美し、舞と樂を獻奏した。これから一人の子は、王に從ひ京師に入り、王政を忠實に輔佐したので、王は之に處容と名づけ、美女を以てこれに妻はせ、大いにその歡心を買ひ、永く

之を留めやうとして、又級干の職を賜はつた。ところがその妻は頗る美貌なるため或る時疫神がこれを戀慕して、人に化けて暗夜人なき時、竊かにその家に至つてこれと通じた。處容は外から家に歸つて來たが、二人の共に寢てゐるのを見て、其處で

東京の明らけき月に
夜深けるまで遊びて
寢所に入りて見れば
脚が　四つなり
二つは　われのなれど
二つは　誰れがものぞ
下のは我れのなれど
奪ひては如何にすべきか

と、歌を唱へ舞を作し、飄然として退き去つた。その時疫神が忽ち起きて處容の前に跪坐して、「吾は公の妻の美なるを羨んで、今それを犯したが、公の怒らざるを見て實に感服し

た。今後は公の形容を畫けるものを見ても、誓つて其の門に入らぬ」と言つた。これに因つて以後國人は門扉に處容の形を貼りつけ、以て邪鬼の入るを斥けるやうになつた」と。

三　豐凶豫驗　又この日、田舍の農家では、その年の豐凶を豫驗するのである。その方法は地方によつて、色々と異なつてゐるが、多くは、この日の夜、大豆十二箇（但し閏年は十三箇）を水の器に入れて置き、翌朝これを出して檢めて見るのである。そうしてその豆の滋け加減に依りて雨多き月を占ふ。例へば第五番目の豆が膨れてをれば五月、六番目ならば六月が雨多しといふのである。然るに平北地方では外で水を凍らせて、その嵩で以て雨の順不順を見るのである。卽ち當夜十二箇

（豐凶豫驗）

月に喩へて十二箇の器に水を入れ、外で凍らせ、翌十五日の晩に至つて、之を見るのであるが、正月と定めて置いたその器の氷が嵩つてゐなければその正月には雨が乏しいものであり、二月の器の氷が嵩つてをれば、その二月には雨が多く降るものといふて、順次に十二箇月を檢めてゆくのである。而して若も一年中最も大切な植付けの時季に當つてゐる器の氷が嵩つてゐないとか、又は一番多く水の入用な時節に當つてゐる器の氷が嵩つてゐなければ、大變に心配するのである。これは勿論一の迷信に過ぎないものではあるが、この一事から見しも朝鮮人一般が如何にその生活の總てを農事一つに置いて居て、農事に對する着念が如何に深いかを推察されるであらう。

十五日

一　迎月　この日は年新まつて初めて滿月となる日で、名高い名日として、月を祭る日となつてゐる。この日を上元といひ、黄昏のとき月を迎へて、一年の福を祈る習俗がある。即ち迎月といつて夕頃になれば、都鄙を問はず、人々は山に登つて月を迎へるのであるが、

月が出づれば月に向つて禮拜をする。この日の月を一番先きに見たものを吉こいふが、農夫が先きに見ればその年の收穫が多く、學生が先に見れば科擧に及第し、官吏が先に見れば昇官され、子なき者が先に見れば子が生れ、未婚者なれば結婚するこの說が傳はつてゐる。又此日の月を望んで年中の豐凶、水旱を占ふのである。例へば月が白ければ雨が多く、赤ければ、雨が乏しく、濃厚であれば豐年、薄ければ凶年であるこ豫檢するのである。

（迎月）

二　踏橋　當夜に橋を踏めば、その一年中脚が健康で、足の病にかゝるこなく、且つ年中の厄除けが出來るこの傳說により男女老幼を問はず、盛に橋を踏み歩くのである、これ

を踏橋といふ。夜になると橋上は人で埋まり、燥しい人聲と踏み歩く橋音が夜の寂寞を破るのである。これはいふまでもなく、迷信的習俗に過ぎないことではあるが、滿月のこの夜に、若い男女や小供等が、きらびやかに着かざつて、各々群をなして裕々と橋上を踏み歩きながら、皎々たる月色を眺むる光景は、何といつても一の美觀である。思ふに脚と橋の音は朝鮮語で同じくタリ（다리）であるから、かく附會したものであるらしい。

（踏　橋）

三　ノツタリの遊び

これは慶北安東郡邑内に於て行はれる遊びであるが、同地では正月十五日の夜になると、盛粧したる若い女達が群をなして、種々の歌を唄ひつゝ街路を歩き

廻り勢を集める。そして夜半に近づく頃から彼女達は悉く一定の場所に集合し、乙女達は一列縱隊にならんで、恰も橋のやうに體を前屈し、之れに婆さん達が兩側に附添つて一人の少女をして、この人橋の上を渡らしめ、一同は朗らかなる音調で歌を唄ひ夜遲くまで清遊するのである。この人橋をノッタリ（Not Dari）と云ひ、その歌を「ノッタリの歌」といふてゐる。その由來は今を距る五百六十餘年前、高麗朝第三十一代の恭愍王が王女と共に當地へ避難のとき、郡民の男女を問はず、總出となつて奉迎し、赤誠の敬意を表する意味を以て、妙齡の乙女達をして人橋を作らしめ、王女がこれを渡られたことがあつたといふ。以後同地の女子達は當時を紀念するが爲めに、年新まつて初めての滿月となる此の夜を擇み、このノッタリの遊びをやり來つたのが、遂に一つの年中行事となつたのである。茲にノッタリの歌といふのを記してみやう。

◎ノッタリ歌

この橋　何んの橋、

清溪山の　銅橋よ。
×　×
橋の長さは　いくらあるか、
五十五間　踏んで來たよ。
×　×
此の地は　誰の所有地か、
それは　王樣の御領だよ。
×　×
この瓦　何の瓦か、
上溪谷の　玉瓦だ。
×　×
何處から　お客樣が來た、
慶尙道から　やつて來た。

（び遊のリタツノ）

× ×

何事あつて　やつて來た、
戰ひつゞけて　やつて來た。

× ×

ごんな着物　着けて來た、
袷衣の着物を　つけて來た。

× ×

ごんなタビ　穿いて來た、
刺繍のタビを　穿いて來た。

× ×

ごんな脚絆　つけて來た、
紫色の脚絆を　つけて來た。

× ×

ごんな履物　履いて來た、
ノバレを　履いて來た。

×　×

ごんな被衣　着けて來た、
藍色の被衣を　着けて來た。

×　×

ごんな帶　締めて來た、
ひろい帶を　しめて來た。

×　×

ごんな網巾　つけて來た、
ウエオルの網巾　つけて來た。

×　×

ごんな貫子　つけて來た、

玳瑁貫子を　つけて來た。

×　×

ごんな冠紐　つけて來た、

水晶玉の紐を　つけて來た。

×　×

ごんな冠　冠ッけて來た、

龍堂冠を　冠けて來た。

×　×

ごんな馬に　乘つて來た、

白馬に　乘つて來たよ。

四　上元の食物　當日は藥飯を食ふのである。その作り方をいへば、先づ糯米を蒸かし、それに栗・棗・松の實……なごを交へ、蜂蜜と醤油を入れ、更にこれを蒸かしたもので味甘くして一種の風味がある。この藥飯は藥食ともいふ。而してこの朝には嚼癤といつて、栗・

胡桃・松の實……などを嚙碎いて食ふのである。かくすればその一年中に腫物が生ぜないといふ傳說に基いたものであるが、又一說には齒を强くする爲めである、とも傳はつてゐる。この日に嚙碎く栗・松の實・胡桃などの果物を俗にブールム「부름」(Pureum)といふ。これは朝鮮語で腫物の音に結び付けたものであるらしい。又當日の朝に酒一盃を飲めば、その一年中に最善のことを聞き、且つ耳が聰くなるといふ傳說があつて、この日の朝になれば、男女老少を問はず藥酒又は燒酒一盃を飲むのである。この酒を俗に耳明酒又は聾酒といふ。多くはこの酒は、元日から別に用意して置くのである。

而して此日に藥食を喰ふ起源は、新羅第二十一代の紹智王が、正月十五日天泉亭に行幸のとき、一羽の烏が何處よりか書を啣みて飛び來り、鳴いて其の書を王の前に落した。王直ちに之れを拾ひ見るに、外皮に「開見二人死不開見一人死」と書いてある。これを日官に命じて占はしむるに、日官奏して曰く「一人とは王樣にして二人とは不明なり」と云ふので、王これを開見すれば「射金匣」と書いである。王直ちに宮殿に歸り之れを射しに、鮮血匣外に流るゝ、匣を檢すれば中に王妃と梵修僧在り、乃ち潛謀不軌をなすことを知り、之れを捕へ

て誅せられた。王は烏によりて難を免るを得たので、之に報ゆる爲に、糯米の飯を作りて食はしめたといふ。爾來これが國俗となりて、今日まで全國到る處に行はれてゐる。

五　洞神祭

如何なる部落に於ても、必ず年一回は洞神祭を行ふのである。多くは正月十五日午前零時の初刻、卽ち十四日の夜十二時過ぐる頃、各部落に安置されてゐる洞神に詣で年中平穩無事で、病氣など流行せず、豐年になるやうにと祈るのである。その洞神の安置されてゐる場所は、大抵大きな古木ある所を擇び、これを洞神の宿る主體とするのであるが、多くは槻・槐・榎・松などである。卽ちこれらの古木には、洞を守る神が宿つて

（洞　神　祭）

るるを爲し、洞祭を行ふには、古木の周圍から、之れに至る小徑の兩側並に祭主の自宅に至るまでの間に清い黃土を撒き、古木と祭主の宅の入口には、白紙片と松枝或は竹枝を疎に懸りた左綯の〆繩を張つて置く。此の日祭祀を行ふ者卽ち祭主は、新しい衣服に着換へて、夜半頃洞神の所に至り、眞油を入れた猪口に鼎足の心を立てゝ、これに火を付け、酒・明太・白餅・棗・栗・梨・乾柿などをその木の下に供へて、午前零時の初刻「我が村を守る神さまよ、何卒村內を安寧幸福ならしめ給へ……」といひながら、禮拜するのである。

この洞神祭には洞民の中最も淸潔なる男子（喪期にあらざる者、家族中に出產者或は姙婦のなき者）等を洞會に於て選定し、これをして祭祀を執行せしむることになつてゐる。卽ち祭主は二三日或は一週間前より、夜間淸水にて身を淨め、肉類を喰はず、喪人又は病人などに逢はぬやうに注意する。尙洞民も洞神祭前の一晝夜に亙りて、男女老幼を問はず、非常に謹愼するのである。

而して祭主は此日午前中に、その洞の有司をして洞民會を招集せしめ、祭費の支出並洞神祭の狀況を報告し、祭餐及別に用意したる酒食を餐する。從つて洞會に於ては、翌年の祭費

及其他の事項を協定の上、新任有司を選定するのである。洞の有司とは洞會の事務執行者のことにして、その任期は普通一箇年としてゐる。

この洞祭は、普通年に一回と定められてゐるが、若し年内に傳染病、其の他悪病が流行すると、更に祭人を選んで、それに要する器具までも新調して、更に祭のやり直しをするのである。

（野火戯）

六　野火戯　この日田舎の人々は夕飯を早く畢り、群をなして野原へと馳り出で、枯れた芝生の上に火を放つのである。これを野火戯といふ。冬の間乾き乾いた芝生は、火の手忽ち廣まり、一面の曠野は瞬く間に火炎の海原となつて、しまふのである。彼等はこうして

靜寂な村落の表に、歡呼の世界と燋熱の天地を描き出した後、月の出づる頃、恰も勝戰した兵士が凱歌を擧ぐるが如き思持ちで、意氣揚々と歸つて行くのである。

然るにこれが行はれる原因に就ては、田畑の雜虫を除き又新芽の旺盛を期せんが爲めに、するものであるといふ說もあり、又一說には新年の人々は當日の晝からこの炬火戰の準備に取りかゝるのであるが、夕頃になれば各其の炬火の運が火焰の如く、盛んになれと祈る心の願ひから、出でたるものであるとの說もある。何れにしても、惡い意味から出たものではない。

（距　火　戲）

七　炬火戲　これは俗に炬火戰といふもので、實に男性的の遊戲である。村々

を手にし群を爲して山上に登り、月の出づる頃を期して、此方の一隊が先づ他の一隊に對して、「さー來い」と呼びかけると、向ふからも「よし來い」と應じながら、喊聲を擧げて走り寄り手にした炬火で手當り次第に撲り倒すのである。やゝ暫く撲り交はしてゐる中に、一人・二人・三人……の降參者が出で終末にこの降參者の多く出た方を負とするのである。かくの如く各地の山上で、少年は少年を、青年は青年を、それぞれ相手として相對し陣を張るので、この日村々では、實に勇ましい千兵萬馬の練習が開始されるやうである。

この炬火戰は炬火で撲り合ふのではあるけれども、その割合に負傷者を出すことはなく、然も外觀が非常に華かで、如何にも壯觀なものである。

これは古來全國的に盛行されてゐた習俗であるが、近來漸次廢まれて、今日は山間僻陬地に於て行はれるのみである。

八　紙鳶の飛揚　元日より二十日までの間に、小供等が紙鳶を飛ばし揚げるのは、殆んど全朝鮮的に行はれてゐるが、殊にこの日になれば、厄拂ひといつて少年・青年とを問はず、盛んに此の紙鳶揚げをするのである。厄拂ひとはその年の災厄を遠くへ追ひ送るといふこと

で、紙鳶に送厄こか送厄迎福こかいふ文句を書き、絲には火繩をぶら下げて揚げるのである。そうして紙鳶が相當に高く揚つたこころ、火繩につけておいた火が、だんだん絲に近づき終には、絲の中間を斷ち紙鳶を遠くへこ放してしまふ。又絲を他人の飛揚せる紙鳶に引かけて斷つことも

（揚飛の鳶紙）

あるのである。これが卽ち厄拂ひこいふもので、自分の放した紙鳶が、なるべく遠くへこ飛んで往くほど喜ばれるのである。

然るにこの紙鳶の起因に就ては、傳へられてゐるこころに依れば、唐の安祿山が宮中の楊貴妃こ消息を通ぜんが爲に、飛揚せしより始まつたこいふ說がある。

九　獅子戯

これは半島の東海岸地方に行はれる遊びの一にして、新羅時代から傳つて來る風俗であるが、この日になれば、村の農夫などは總出となつて、獅子を先頭に虎・狼等の假面をかぶり、樂器を打ち鳴しながら、村中を巡り歩き、穀物金錢などを貰ひ集めるのである。これを獅子まね戯、卽ちサザノリ「사자노리」といつてゐる。

（獅子戯）

然らばその集めた金品は、如何なるところに使ふかといへば、一箇人の爲めに使ふのではなくして、その村の公共費用に充つるのである。卽ちその金錢を以て婚禮用の道具や葬式用の道具などを買ひ入れ、村の共用となすこともあり、又は洪水の爲めに崩壞せし堤防

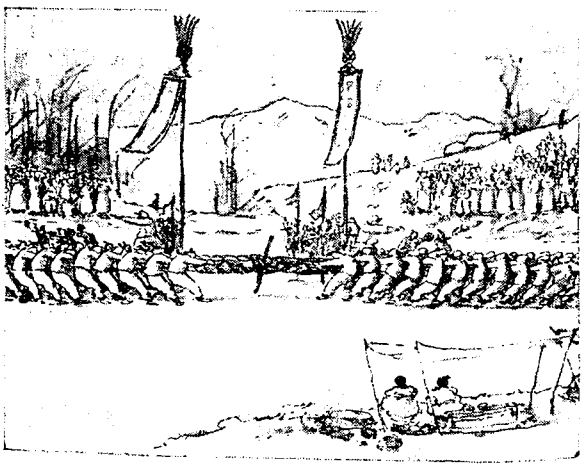
改築の費用に充つることもある。かくの如く、一の遊びが意義ある成果を生み出すのであつて、頼もしいことである。

索戰

これは正月の遊戯として、古へより半島の中部以南の各地に盛行せる習俗であるが、多くは正月の十五六日頃に行はれる。即ち一部落が東西に分れ、各戸より藁を集めて二條の大綱を作り、村の人々は男女こいはず、總出となつて、綱を引いて勝負を試みる。これを索戰——朝鮮語で줄다리기(ejul dariki)——と云ふ。綱には雄綱・雌綱ありて、東を雄・西を雌と稱する。勝方はその年、コレラの如き傳染病に罹らず、尚又農事も豊作をする、こいふ説が傳へられ、人々は果して年事の豊凶が、この一事に左右さるゝかのやうに、思ふ爲めか、喊聲を擧げながら、必死的に勝負を決するのである。東國歳時記の正月上元の條には、「湖西俗、有炬戰、又以絢索、分隊把持、相牽引、不被引者爲勝、以占豐……」とあり、又「嶺南俗、有葛戰、以葛作索、大可四五十把、分隊相引以決勝、謂之占豐。」とある。それが一方は藁、一方は葛こいへども、湖西の索戰と嶺南の葛戰は同一のものである。

又地方に依つては、一面或は一郡が東西に分れ、大々的に索戰を行ふこころもあるが、これ等の場合には、多少の負傷者を出すこともないのではない古來のあらゆる慣例が廢れて往きつゝある今日に於ても、索戰だけは今猶盛んに行はれてゐる。

索戰は實に農村的又は大衆的の特殊な意義を持つてゐる遊勢を擧げるが、實に勇ましい氣分溢るのである。



（索　戰）

戯である。これを行ふには千兵萬馬が陣を張るが如く、先づ東西に相對し列を整へ、陣頭には戰必勝こか勝戰旗こかいふ文句を書いた大小の旗を立てゝ、鼓・銅鑼なぎを打ち鳴らしながら、歌つたり踊つたりして大いに威

慶尙道の海岸地方及び大邱の附近では、綱引きをするとき、ケチラチンチンナンヘといふ歌を唄ふのである。これは卽ち「快哉淸正亂に」――쾌재라청정난에(Kwai Chaira Chung Chung nanei)――のことにして、子供又は農夫等の間に行はれる遊戯謠であるが、その由來は傳へられてゐる處に依れば、壬辰の役に日本の加藤淸正軍と激戰を行つた事から起つたと云ふ。こゝにその歌を記して見やう。

夜空にや　星も多い、
　ケチラ　ヂンチン　ナンヘ。
海邊にや　砂も多い、
　ケチラ　ヂンチン　ナンヘ。
松原にや　松毬も多い、
　ケチラ　ヂンチン　ナンヘ。
唄には　節も多い、
　ケチラ　ヂンチン　ナンヘ。
農夫達の　遊んだ處に　草鞋　落ちてないか、

ケチラ　ヂンチン　ナンヘ。
娘達の遊んだ處に　テンキ（髪飾の物）落ちてないか、
ケチラ　ヂンチン　ナンヘ。
爺さんの　休んだ處に　煙管　落ちてないか、
ケチラ　ヂンチン　ナンヘ。
婆さんの　休んだ處に　眼鏡　落ちてないか、
ケチラ　ヂンチン　ナンヘ。

石戰

これは正月の遊びとして、古へより各地に行はれてゐた習俗である。卽ち索戰を行ふ場合の如く、一部落或は一地方が、東西又は南北の二部に分れ、數百步の距離に相對立して、相互に石を投げ以て勝負を試みるのであるが、これを石戰と稱する。一に便戰——朝鮮語でペーンサム（편싸 PyunSam）——とも云ふ。或は五月五日、或は八月十五日に行はれることころもあつたが、これは地方的に時期が變遷したからであらう。

而して石戰の俗に就て東國輿地勝覽に依れば、第二十四卷安東大都護府風俗の石戰條に、

毎年正月十六日、府內居人、以中溪分爲左右、投石相戰、以決勝負、庚午討倭時、募爲先鋒、賊不敢戰。

とあり、同三十二卷の金海都護府風俗の條に、

毎歲自四月八日、兒童群聚、習石戰于城南、至端午日、丁壯畢會、分左右、竪旗鳴鼓、叫呼踴躍、投石如雨、決勝負乃已、雖至死傷無悔、守令不能禁、庚午征倭時、以善投石者、爲先鋒、賊不能前。

とある。又京城の石戰に就ては、東國歲時記上元の條に、

三門外及阿峴人、成群分隊、或爲持棒或投石、喊聲走逐、爲接戰狀於萬里峴上、謂之邊戰、以退走邊爲負、俗云三門外勝則畿內豐、阿峴勝則諸路豐、龍山麻浦惡少結黨救阿峴、方其酣鬪、呼聲動地、纏頭相攻、破額折臂、見血不止、雖至死傷而不悔、亦無償命之法、人皆畏石回避、掌禁該事、另行禁戢、而痼習無以全革、城內童竪、亦效而爲之於鍾街琵琶亭等處、城外則萬里峴雨水峴爲邊之所。

とある。これらのことから推して見ても、石戰の概況は窺ひ知るであらう。而してこれが

最も盛んに行はれるは、半島の中部以北の地方であつた。

石戰は跳板の如く、朝鮮特有の習俗にして、その由來は甚だ古い。隨書の第八十一卷高句麗傳に。

每年初、聚戲於浿水之上、王乘腰輿列羽儀而觀之、事畢、王以衣服入水、分左右二部、以水石相擲、誼呼驍逐、再三而止。

（石戰）

とあるが如く、高句麗時代には、既に國家的一儀式として、國王親臨の下に行はれたものである。この歳首浿水上の石戰は、實に常備不廢の深意を有する一娯樂的習戰であつた。その遺風が一の民俗となつて、李朝の最終に至るまで盛んに行はれてゐたが、日韓併合後、官より禁止する爲め、今日は殆んど廢まれてしまつた。

二月

一日

正月の遊戯としての柶戯・紙鳶及索戰等は、この日を最終として止める。田舍の農家では此の日を人夫の日(일군날)といつて、業を休み、色々な遊戯をするのである。中農以上は、農夫や小作人等を招き、酒肉などを御馳走する。これは春夏秋の農作の時節に、自分の田畑をよく作つて貰ひたいとの意味であるが、御馳走になつた農夫などは、酒に醉ふて笛を吹き、小鼓や大鼓を打ち鳴しながら、愉快に遊ぶのである。この日の行事を列記すれば左の通りである。

一　大掃除　此の日は一年中の大掃除日として、天井から家屋の内外を掃除するのである。草屋にはヤスデが多く發生するので、これを追ひ拂ふ方法として、「香娘閣氏速千里」といふ呪文を書いた紙片を、天井又は椽等に貼り付け、又松の葉を屋根に挿入れ、或は庭にま

くのである。

二　食　物　この日には都鄙を問はず、松餅こいふ餅を食べることになつてゐる。この餅は粳米の粉に湯を注ぎ、揑ねて卵大の皮を作り、これに小豆・赤豆又は棗・栗などの餡を入れて、蒸甑に松の葉と交互に並べて蒸す、そして蒸しあがれば水で洗つて松の葉を去り、胡麻油に付けるのである。これを蜂蜜につけて食べる。昔は此の日奴婢に對し、その年齢と同數の松餅を與へる習俗があつたが、最近に至りては殆んど廢れてゐる。

三　風神祭　これは慶尚南北道地方に行はれてゐるものであるが、その地方の各家では、風上げこいつて、この日の早朝に種々な山河珍味と御飯を臺所又は後園の清い所に供へて、天に向ひ祈り上げるのである。この祭を行ふには、白紙を其の家族數と同數に切りて、一枚に一人づゝ其紙片に家族の生年月日を書いて、これを一枚づゝ燒き上げながら、好運を祈るのである。これにも燃えたる紙の灰が、空に高く上がれば吉運なりこいふ。又その沿海岸の各地に於ては、臺所又は後園の清い所に、竹の枝を葉のあるまゝに立て、色彩の布片や紙片を付け、これを祭壇とし、その下に祭物を供へて、上記の如く祈り上げるのであるが、これ

が濟めば、その祭壇卽ち竹の枝は二十日までそのまゝ置いて、毎日の早朝井戸の水を汲んで來て、新しいバカチにこれを盛り、その下に置くのである。この風上げといふものが行はれるところに就て、傳ふるところに依れば、天上に靈登媽々（媽々とは婆さんの意味である）といふ婆さんがゐて、年々この日になれば、人間界を視るが爲めに、天上から降りて來て、二十日に歸るこの說がある。しかしその婆さんが降りて來たゞけでは、何も問題にならないけれども、その婆さんが、人間界に降りて來るときには、必ず娘か嫁かの中にて、何方か一人を連れて來るさうである。そして娘を連れて來るときには、別に何らの

（風神祭）

問題はないが、嫁をつれてくるときには、何故かその嫁が癇癪を起して、暴風を呼んで來るが爲めに、田畑を荒らさるゝこと甚しく、又海岸に於しは難破船が多いといふ說が傳つてゐる。俗にこの風を靈登風といふ。それ故に一般の農家では、靈登風を避けて、農作の被害を免れるが爲めに、又漁村に於ては、難破船の被害を免れるが爲めに、風上げといつて靈登婆さんとその嫁とに祈り上げるさうである。これは海岸には、每年二月になると、偶々暴風起り遭難船が多くあるので、これ神の所爲なりと信じ、仍つて風神を祭ることになつたらしい。兎に角、これは一の迷信に過ぎないことであるが、それにしてもこの一事が、よく人間界の姑と嫁との關係の一面を物語つて居るものではないかとも見られるのである。而してこの風神に對する稱號は靈登神・靈童神・嶺東神・嶺登神又は嶺童神といふので、何れが正當であるかは確かでない。又その風神の起原に就ても、諸說紛々としてそれぞれ違つてゐる。而して蔡濟恭の焚岩集に依れば、風神歌に左の如く記されてゐる。

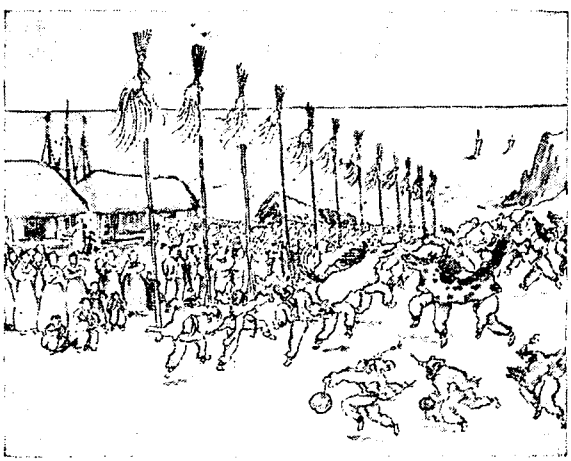
新婦作餅兒買肉。翁婆再拜神前伏。神來但欲莫謂貧。昨日分糯儂亦得。黃土灑庭鼓鼕々。村家有願誠不移。宅中牛羊迭牛雞。分與衆子爲生理。東陵種木多烏雀。願神驅去滋我穗。

秋成及時入宜倉。令我肥膚免楚箠。生孫二世或三世。秪恐名入簽丁裏。神手祐我一家人。

明年二月復迎神。

四　濟州島の燃燈祭　これは濟州島の歸德・金寧等の地方に行はれる風俗であるが、その地方では十二箇の木竿を立て神を迎へて祭を行ひ、種々の形を造り彩帛を以て飾りをつけ、躍馬戲を作り、神を悅ばせるのである。これを燃燈といつて、二月一日より始まつて、十五日に至つて止めるのである。

按ずるにこの燃燈は、朝鮮語で 연등(Yun teung)であり、慶尙道の風神の靈登は朝鮮語で 영등(Yung teung)である。燃燈と靈登卽ち연등(Yun teung)と영등(Yung teung)は、朝鮮語でその音が類似せるを以て、



(濟州島の燃燈祭)

この點から推して見れば、濟州島の燃燈祭と摩尚道の靈登祭は、或は同一の起原から出でたる風俗ではないかと思はれる。ところがこれを確然と證すべき文獻が見出されないから、輕々しく斷言することは出來ない。

六日

この日農家では、夕頃月光が未だ微かなるときに、參星（三十八宿の一たる星）の現はれるを見て、この參星と月との位置により、その年の豐凶を豫檢するのである。卽ち參星と月と同行なれば、豐凶相半であり、參星が後なれば豐、前なれば凶と決するのである。俗にこれを參星占といふ。

九日

この日には、如何なる樹を植ゑても、よく根付くといつて、年々この日になると、各地に於ては盛んに植樹をするのである。庭園に花草を植ゑるのも、多くは此の日にする。俗にこ

の日を「物方盛日」といひ、枯木を倒に植ゑても根付くこの俚諺がある。

驚蟄日

この日は、地中や壁間などにて、冬を越えたる昆蟲類が、春の溫暖に蘇つて這ひ出づる日として、千歳暦に定められてゐる。この日になれば、都鄙を問はず各家では壁や土塀の修繕等の左官工事を行ふのである。傳へられてゐるところに依れば、この日に土を採つて壁を塗れば、ビンデ(南京蟲)が全滅されるといふ説もあり、又一説にはその日に灰を水に溶かして器に盛り、家の四隅に供ふれば、ビンデが悉く死するこの説もある。

(植樹)

而して田舍の農家では、この日に麥の芽を見て、その年の豐凶を豫檢することがある。又此の日に楓の木を祈り、それより出る水を飲めば、胃病・痳病及び其の他皮膚病に効ありとの說が傳はつてゐる。

上丁日

これは二月の一番初めの干の丁の日に當る日にして、春季はその地方の儒生中にて、德望ある者がこれに當る。その他祝文を朗讀する大祝や、香燭を

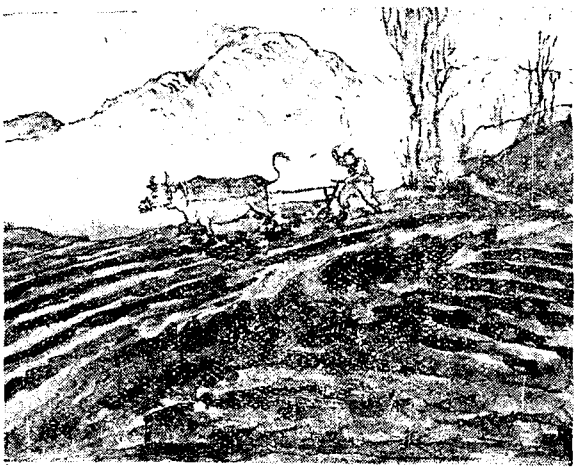
（文廟釋典）

の文廟釋典を行ふ日である。文廟とは孔子及び其他の名賢の位牌を安置せる所にして、各郡に一箇所づつは必ずある。二月及八月の上丁日になれば、儒生等が文廟に集まり、大祭を行ふのである。司祭は三獻に分ち、初獻は郡守、亞獻及終獻

奉ずる奉香や、その他諸般の雜役を設備する執禮・執事等があり、牛豚の犧牲を用る、蒸した御飯を供へて、威儀嚴肅に執行するのである。

二十日

田舍の農家では、この日の天候を見て、その年の豐凶を占ふことがある。卽ちこの日に雨降れば豐年であり曇れば平年であり、晴天であれば凶年といふのである。



（りま始の耕作）

清明日

これは千歲曆に定められてゐる日にして、寒食日の一日前の日となるが、偶には寒食日と同一の日に當ることもあるので、各司に賜つたのである。

これは火を清新にするの意味であつた。ところが楡柳の火とは、楡の樹と柳の木とを摩擦すれば、五行相生の理に因つて、火がよく付くからであつたらしい。昔は現今の如く、燐寸といふ便利なものがなかつた故に、大風のとき火を禁じたる後、各部落に於ては火に困るときが往々あるので、官より火を頒つことがあつたのである。因みにその當時には、頒火といふことが行政官の一の事務となつてゐた。昔し京城に於ては、この頒火事務が、五部の管掌事項中の一つであつた。この日に田舍の農家では、春耕を始めるのである、いはゞ鍬始めである。

寒食日

これは千歳暦に定められてゐる冬至の後、百五日に當る日を寒食日と稱するので、二月になるときもあり、又は三月になるときもあるが、多くは二月になるのである。此の日は酒・果・脯・餅・麵・炙及其他種々の御馳走を作り、これを家廟に供へて祭を行ひ、又祖先の墳墓に詣つて墓祭を行ふのである。即ち年中に於ける墓參の日となつてゐる。この墓參を省墓といふ。祖先の墓が遠隔の地にあるものは、墓直（墓を守護する者を墓直といふ）をして、

代理に祭を行はしむる。だから年々この寒食日になると、郊外の墓地には、老少の男女盛裝して參墓をするから、一大美觀を呈するのである。又改莎草といつて、墓地の周邊の草を刈り墳形を修め、又は墓地の周圍に樹を植ゑ、その他墳墓に關する一切のことを、皆この日に行ふのである。寒食日に就て、

二月なりや寒食日
遠き山にも春萠えて
枯れし草木も蘇へる
人は　死に行くばかりにて
再び歸り來れば　こそ
後人　これを哀しみて
寒食日を　設けたり
亡靈　祭る墓の上に
胡蝶の舞ふも　かなしけれ
折水没みて　沐浴し

流れに臨みて　詩を賦する

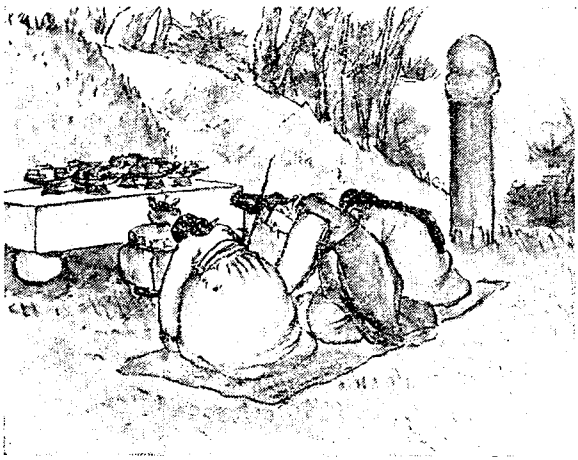
山紅に　花笑ひ
柳は青く　絲のやう
農夫は鋤を　野に運び
牛にまたがる　童等は
金の鞭もて　春を追ふ

といふ民謠が、一般に歌はれてゐる。

昔はこの日に、その名稱の如く、終日火を炊かず寒食する所もあつたが、最近に至りではこれが全く廢れてゐる。その起原は傳はれるところに依れば、昔し晉の忠臣介之推（世では介子推といつてゐるも、荊楚歲時記には介之推と記載されてある）が、奸臣の爲めに追はれて錦山に隱れた後、晉文公がこれを聞き覺悟するところあつて、之推の孤忠を憐み方々に搜しても見附けられなかつた故、求め出さんと欲し山に火を放つたが、之推遂に出ずして木を抱き焚死したので、時人その精忠に感じ寒食したる遺俗なりといつてゐる。ところが劉向別

錄には「寒食蹋蹴。黃帝所作兵勢也」とある。これに依れば寒食といふ名は、既に支那の三代以前の時代からあつたことに違ひない。その起原は兎も角、朝鮮に於てこの寒食日を節日とするのが支那から傳はつて來た風俗であることだけは事實である。

田舍の農家では、この日に樹苗及び穀菜の種を下すのである。これは禮記の「月令仲春之月、天子乃開氷、先薦寢廟」とあるに依つたものである。



（墓　省）

薦氷

これは宮中に於て行ふことであるが、二月中の吉日を卜し氷を大廟に薦めるの

三月

三日

この日には、花煎といふ餅と、花麵といふ麵を作り、之を家廟に供へてから食べるのである。花煎とは杜鵑花を採つて糯の粉に混ぜて作つた團子であり、花麵とは菉豆と稱する青小豆の粉と杜鵑花を混ぜて捏へた麵である。この日を、俗に燕が南より歸り來る日といつてゐる。書堂の學徒や儒生等は、酒肉を準備して山亭河邊に集まり、一日の清遊を試みて詩作りの開接を爲したのである。開接とは、書堂に於て詩作りの開始式をいふもので、卽ち春期開學式のことであるが、學校敎育の普及に伴つて漸次廢れるやうになつた。而してこの日に白蝶を見れば、年中に喪服を着ることゝなり、黃蝶又は虎蝶（虎蝶とは虎のやうな斑文のある山の蝶をいふ）を見れば、その年の運吉なりとの說が傳はつてゐる。又この日髮を水に洗ひ櫛ると、水の流れるが如く髮が長くなるといふて、女子は髮を水に洗つて櫛るのである。

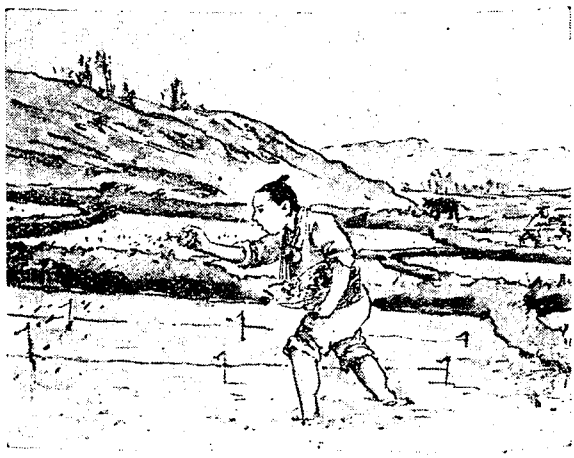
生子の祈り

有名な山、古樹の下、又は三神堂等に於て子を祈り求めることは、全朝鮮的に行はれてゐる古代よりの風俗であるが、忠淸北道の鎭川地方に於ては、三月三日より四月八日までの間に、子なき女子等が巫女を率ゐて、牛潭といふ所に至る女子が絶へないのみならず、觀客も亦雲集するので、非常に賑かであつたが、これ等の風俗も、今は漸々廢れつゝある。

（生子の祈り）

り、その上の三神堂及び東西龍王堂に於て、子の生れんことを祈るのである。昔日は年々この頃になれば附近の部落から、祈りの爲に來集す

山や樹下に於て、または三神堂に於て、神を祈るこいふ習俗の起りは何んであらうか、之を朝鮮古記に徴するに、壇君の父桓雄天王が、太白山上の神壇樹下に降下せられ壇君がこゝで誕生せられた、この故事により、古代には壇を山上の樹下に設けて大祭を行つたことが今日まで傳はつて來て、今尙山上樹下に祭るこ云ふ風俗こなつたらしい。又三神堂に祈ることも壇君三世を祭る遺風である。三神堂こは朝鮮民族の國祖たる桓因天帝・桓雄天王・王儉壇君の三世を祭る所であつて、到る處に三神堂のない所はないのである。



（苗代の始まり）

穀雨日

これは千歳暦に定められてゐる日であるが　田舍の農家では穀雨節から苗代を始めるのである。南鮮地方では、穀雨日の前後三日間に、梓の木を斫り、その木より出る水を飲めば、胃病・痳病・皮膚病等に効ありとの說が傳はつてゐる。今日に於ても猶、慶尙南道咸陽郡大知面の瀧湫寺及び全羅南道求禮郡の華嚴寺附近には、年々穀雨日になると、その水を飲みに四方より來集するといふ。又鰬（サヨリ）といふ針魚は、穀雨前後の三日間に最も盛んに出て此の時期を經過すると、直ちになくなるので、江村の人々は、それによつて節季の早晩を占ふのであつた。肅宗時代の文人農岩金昌協の詩に「魚迎穀雨鱗々上」とある。

花柳の遊び

これは上古より殆んど全朝鮮的に行はれてゐる習俗であるが、氣候暖となり、冬の間枯木のやうであつた木々の枝々に新芽を吹いて、紅紫とりぐ〜の花が咲き出す三月になると、郊外の春を賞する爲めに或る日を擇んで、老人は老人、壯年は壯年、青年は青年、婦人は婦人、子供は子供といふ風に、それぐ〜の組を作り、山あり水あり花あり柳ある處に行つて、一日

の清遊を試みる。今は假令二人集まつても會費を募るのであるが、昔はたゞ各自その資力に應じ嗜好に從つて、それぞれ特色ある飲食物を持つて集つたらよかつたのである。

この樣に山麓や水邊で一日を暮し、日陰が地を食む頃、躑躅を折り添へて花棒（朝鮮語で矣방망이（コッバンマンイ）といふ）を拵へ、打興じながら歸るのであつた。これを花柳（花柳の遊び）といつたが、朝鮮語で矣다림（コッタリム）といふ。

若い女子達は三々五々と群をなして、朗らかな聲で、

今は何ごき　花見時
春の三月　好い時節

うちの父さん　還暦の
祝ひの酒は　千金よ
その酒飲んで　醉ひまぎれ
お唄を一つ　願ひましよ
いゝこも〳〵　ごんな唄
花のお唄を　詠みなされ。
眞赤な〳〵　つゝじの花は
簫韶九成の　舞ひを舞ふ
歸らぬ恨みの　杜鵑花は
蜀の思ひに　忍び泣く
かをりも清き　白百合は
深山の谷に　ひゝり咲き
すがたやさしき　鳳仙花

お庭の隅に　咲いてゐる
白い小さな　芹の花
池のほとりの　溝に咲き
若い盛りの　娘達は
お部屋の中に　咲いてゐる。

……と唄ひながら、山に登つたり降つたりするのである。

昔京城では、弼雲臺の杏花、北屯の桃花、興仁門外の楊柳を勝地としてあつたから、多くは此の邊に集合するのであつた。この花柳の遊びは、古來盛んに行はれてゐたが、今は漸々廢れつゝある。これも年々襲ひ來る生活難の暗影であらうか。

閣氏の遊戯

閣氏(각시)とは女娘のことであるが、年々三月になると、小女達は青草の稍長きものを採集して髪を作り、細き木を削つて拵へたカンザシを挿し、且つ紅裳を着せて、これを閣氏といひ、布團・枕・屏風等を設けて遊ぶのである。

柳笙

柳笙とは柳の笛のことで、子供達が柳の枝を折つて、骨を抜き去りその皮で吹物を作り、菜花霞める野邊で、これを

（柳笙）

吹きながら、

× ×

おいらは〳〵　春なれや

おいらは〳〵
春なれや
柳の枝で　笛
抜いて
口に啣へて
吹きながら
ラレ〳〵　ラ
レラ面白う。

つゝじの花を　摘んで來て
金剛山を　形づくり
まゝごと遊び　面白う。

× ×

おいらは〳〵　春なれや
五色の蝶々　飛び廻り
青い小鳥の　啼く中を
ケキヨ〳〵　ホケキヨ面白う。

と、唄つたりして、遊ぶのである。

青春敬老會

これは江原道の江陵地方に行はれてゐた風俗であるが、其地方では年々三月になると、或る晴れ日を擇び、七十以上の年長者を名所に招待し、慰安會を開催する。これを青春敬老會

こいつてゐる。この會合には、貧富貴賤の別なく、七十歳以上の者なら誰でも皆參列せしむるのであつた。この風習のことは輿地勝覽にも記されてゐることであるが、最近に至つては行はれてゐない。

慶州の四節遊宅

輿地勝覽に依れば、昔慶州では、春夏秋冬の四季に遊賞する場所が別々になつてゐたことある。卽ち四季の遊び場を四節遊宅こいひ、春は東野宅・夏は谷良宅・秋は仇知宅・冬は加伊宅こなつてゐる。これは新羅時代のことである。

鄕飲酒禮

全羅北道の龍安地方では、年々三月になれば、各々其の部落の或る一定の場所に集まり、年齡の順に着席し、其中の一人が席前に立つて誓文を朗讀する。この時一同は肅然こして之を聞き、それが濟むこ、一同再拜の上團樂の裡に飲食を共にした。之を鄕飲酒禮こいふので

ある。又秋の節に同じ催しをするのであつた。これは儒教の遺風にして、一村の風紀を保つと共に、相互の親睦を圖るものであつたが、近頃に至つて、全く廢れてゐる。而して輿地勝覽によると誓文の意味は凡そ左の如くである。

「父母に不孝する者、兄弟の間睦じからざる者、朋友に信なき者、朝廷の政事を誹謗するもの、守令（郡守のこと）に順服せざる者等は、何れも皆逐罰する。且つ將來を戒しむるに、互に德業を勸め、互に過失を規正し、禮を以て習俗を爲し互に患難を救助すること等であるが、凡そ同鄕の者は、大いに孝友忠信の道を盡し、以て厚生の福利を圖るべし」と。

（鄕飲酒禮）

弓術會

これは昔より殆んど全鮮的に行はれてゐた風俗であつて、京城を始め各地方の武士は、年々三月中の或る日を擇び、弓術會を催し、組みを分けて勝負を試みる。弓術會を催した際には、妓生を侍らせて酒を飲み大いに

（弓術會）

勇氣を揚げるのである。弓術を試みる時には、鮮かな服裝をした妓生が大勢武士の背後に整列し、朗らかな聲で歌を唄ひながら、武士の氣を勵ますのであるが、矢が目標（これを朝鮮語で관혁（クワンヨーク）kwanyuk といふ）に適中すれ

ば、妓生達は지화자…(chi wha cha)と唄ひながら踊るのである。この會には、附近の男女老少の觀客が雲集するので、綠陰の下に人の山、人の海を現出するのである。又秋にも同樣の催しをするのであるが、これも昔のやうに盛んには行はれなくなつた。

養蠶の始まり

一般民家では、年々三月になると、桑の葉を採りて蠶飼を始めるのである。朝鮮に於ける養蠶の起原は、古史に依れば、箕の時代から始まつたとあるが、經濟六典に依れば、李朝國初に種桑法を頒布し、以て大戶は三百本・中戶は二百本・下戶は百本とし、若しも規定に依り桑木を植栽せざる者は罰することになつてゐた。而して養蠶は、元來女子の擔任となる仕事であつて、宮中には后妃の親蠶制があり、年々三月になると、王后が內外の命婦を率ひて、後苑の桑壇に至り、桑の葉を採つて親蠶の禮を行ひ、人民を奬勵されたのである。昔しから蠶業を重要視したことは、この一事から推して充分に知り得ることである。李朝實錄には左の如く記されてゐる。

成宗八年春三月。王妃行親蠶禮。繕工監。築採桑壇于昌德宮後苑。親蠶執事。採桑。一品內命婦二。二品內命婦一。三品內命婦一。一品外命婦二。二品外命婦一。三品外命婦一。從採桑。外命婦一品至三品。尙儀一。尙宮一。尙記一。尙傳一。尙功一。典製一。典贊四一引內命婦。一引外命婦。一引諸蠶室。一引執鈎筐。二十四年春三月。王妃詣後苑採桑壇。率王世子嬪及內外命婦。行親蠶禮。賜採桑女及蠶母綿布(以下略)。先是。大宗常敎曰。衣食。民生所重。不可偏廢。古者有親蠶之禮。自今。令宮中納麻枲以備紡績。

端宗二年九月。戶曹啓。請令各邑都會官。取蠶種。分授於諸邑。使之養蠶。考其勤慢。以爲褒貶之守令。從之。經國大典戶典。諸道宜桑處。置都會蠶室。成籍。藏於本曹本道本邑。養蠶取絲繭上納。

仁宗御製の詩に曰く。「一家有兩婦。巧拙百不敵。拙者念其拙、一日織一尺。巧者恃其巧、百尺期一日。理鬢學宮粧、好逐花間蝶。逐蝶又折花、長笑拙者織。秋風一夕至、萬戶砧聲急。拙者先裁衣、歌舞堂前月。巧者悔何及、天寒翠袖薄。呵手弄機上、梭寒易拋擲。難將花與蝶、敵此風霜夕。」とあり、顯宗御製の耕蠶圖に曰く、客歲之冬。偶得短軸。是耕蠶之圖

也。以妙手而善形容田家之辛苦女工之勤勞。每一披閱。若親見之。可謂二美具於一幅也。……である。

國師神祭

これは昔、忠清北道淸安地方に行はれてゐた風俗であるが、東國歳時記に依れば、「三月の初、縣の首席吏が邑人を率ひて、東面の長岬山上の大樹の下に至り、國師神の夫婦を迎へて邑内に歸り、縣の官衙及び各廳舍に於て、巫覡を用ひて、酒食を供へ、鉦と皷を打ち鳴らしながら、神祀を行ひ、二十日後に至つて、その神を元の處に奉還する祭儀で、二年毎に、これを行つた」である。

（國師神祭）

餞春

三月三十日は、春の最終の日なので、詩人墨客は、春を惜む意味にて酒食を携へ、山間河邊に到り、詩を作りこれを吟じながら、一日の清遊を試みるのであるが、これを餞春詩會といふ。

蕩平菜

これは三月中の食物とするものであるが、菉豆泡（青小豆を水に浸し臼にて碾き、布嚢に入れて漉した汁を煮じ、これを器に移し、冷却したものである）を作つて、稍尖長に切り、豚・芹・海衣等を入れ雜ぜて、醋醬油に掛け、冷してこれを食べる。これを蕩平菜といふ。

（餞春）

饑餅及環餅

餅屋で粳米の粉を以て、豆の餡を入れて鈴形の餅を搗く、これに五つの色をつけて五箇づつ連ねるこ、恰も珠を連結したものゝやうになる。或は青こ白この兩色を用ひ、半月形の餅を拵へて、二箇づつ重ねるが、これを饑餅こいふ。又粳米こ松の皮こ、青艾の葉を混ぜ、臼にて碾き、これを蒸して圓形の餅を造るが、これを環餅こいふ。

四馬酒

四馬酒こいふのは、春の初めの午の日から四番目の午の日まで、四回の午の日にくりかへして釀造を重ねるので、かく名づけたものであるが、三月に至つてこれを飲用するこになる。この酒は一年を經過しても味の變らない名酒であつた。昔し東岳李安訥は、南宮續の四酒の試飲會に臨み、左の如く讃美の詩を作つたこがある。

君家名酒貯經年。釀造應從玉蕤傳。

野菜賣り

都會地では三月になると、毎日早朝から野菜の賣子が、白菜及び大根の新しい葉を背負つて「野菜買ひなさい」と叫びながら、方々の街路を歩き廻る。これは各家で漬物や其の他の食料品に新春の新しい野菜を用ゐるからである。この月には都鄙を問はず、一般に御飯を新しい野菜の葉に包んで食べることあるが、これを朝鮮語で생치쌈(Sengchi sam)といふ。一見して衛生的にも思はれるが、野菜の葉をよく水に洗ひ、又胡麻油を掛けて食用するのであるから、衛生上害となる虞はない。

極樂の途迎へ

これは開城に行はれてゐる風俗であるが、年々三月の暮になれば、男子は男子と、女子は女子と、それ〴〵組みを作つて北城址越えをするのである。朝鮮語で길마지(Kil ma chi)といふ。北城址は、開城の東北約二里の天摩山にある古城址で、若し一度でもこの城址を越

えるこ、それこそ一生涯の罪過を贖つて、極樂への途を修むることが出來るこいふ說が傳つてゐるので、萬難を排して、北城址越えをするのである。

北城址越は、非常に途が險しいので非常な努力を要するから、家族どもは城址越えの歸るのを待つて、色々な飲食物を拵へ途中まで出迎へに往くのであるが、多くは朴淵瀑布か、或は逝斯亭か、槐亭邊まで出かけて往く。而して出迎への目的は過去の罪過を贖ひ、極樂への途を修めて歸る家族を、慰め祈るにあるから、其所を往來する人々を大概呼び寄せて、飲食を分つので

（極樂への途迎）

四月

八日の觀燈

この日は釋迦の誕生日なので、浴佛日といつて、士女は新しい衣服を着換へて附近の寺院に詣でる。又是日の夕を燈夕といつて、各家では五色の紙を貼つた燈に點火し、室外に揚げるのである。最も盛んに行はれるのは、昔高麗の首都であつた開城である。佛教が朝鮮に入つて來たのは、遠い昔しのことであるが、高麗時代にそれが最も隆昌を極めたからである。今でも開城では、年々この日になると、空は提燈に滿され、店頭に造花に包まれ、家毎に揚げられた色燈籠の眺めは、見るからに華やかで非常な盛觀を呈するが、夜になつて、提燈や燈籠に火が點ぜられ、辻ごとに花火が上げられる頃になると一層の華やかさに滿される。而して是日夜の燈火に就ての民謠に、

四月八日は　南風薫る

三角山の頂きに
鳳凰降りて　舞を舞ふ
漢江の水　深くして
河圖洛書　出でしこか
百工相和　景星歌
この日にこそ　われ歌はん
堯之日月　舜之乾坤
太平の代を　讃ふべし
われ年老ひて　萬事終らば
若き日の　行樂を語らん
黄金の胄に　身をかため
細柳營に　入り行けば
長安萬戸　燈をつるし

山も退けよと　萬歳する
父母様　生きて居ましなば
觀燈節を　見んものを

とあるが、これから推しても、當夜の盛觀を想像する事が出來るであらう。

昔は都鄙といはず到る處に於て、八日から二三日の前に、燈竿といつて、長き木を家毎に建て、竿頭に雉の羽又は松枝を挿し、或は染色した絹旗を掛け、家族の數と同數の色燈を掲げるのであつた。又この日の夕には、家族の順位に依つて上から下へと順次に燈火を點じ、燈火の最も明るいのを以て吉とするのであつた。贅澤な者になると、大竹を數十本縛つて之を立て、或は五江（京城に隣接せる漢江沿岸の五村をいふ）邊りから、帆檣を運んで棚を作ることもあり、或は日月の輪、又は龜燈を掲げたりした。又火藥を紙に包み之を繩で吊り下、げて、火を點じ、花火のやうにして樂むこともあり、又藁を以て傀儡を作り、衣裳を着せ繩を付けて竿頭に吊し、これを動かし笑ひさゞめくこともある。

高麗史を按ずれば「本朝の習俗に、四月八日は釋迦の誕降日と云ひ、家毎に燈火を點ずる

が、それより數旬前に、小供等は紙旗を拵へて、城内(今の開城)の街路を持ち歩きながら、米と布を求め、以てその費用に當てるのであるが、それを呼旗といつてゐる」と記されてある。惟ふに李朝以來各都鄕の習俗に、この日燈竿に旗を揭げることは、高麗時代の呼旗の遺風であらう。

この夕に用ゐる燈には西瓜・大蒜・蓮花・七星・毬船・皷・・・等の名稱があるが、何れも實物の像をこつて作るからである。又燈面には樓閣・欄干・盆栽・仙人像・花鳥類及び其他動物類——鳳・鯉・龜・鶴——等の讃を書き現はしたのもあれば、又壽福、太平萬歲・・・等の文字を書いたのもある。殊に皷燈には騎馬の將軍や、その他三國故事に關する讃を書くのである。西瓜燈とは、西瓜の形のやうに圓いものであるが、これらの燈には五色のビラ紙を、各隅に貼り付けるのである。而して燈籠を張るには青紅色の紙又は紗布を用ゐ、燈の緣は、色紙で捲き、五色の紙片を繋ぎつけるので、非常に華やかに見える。

又影燈(映讃燈)といふものがあるが、これは燈籠の中に、廻轉する機械を設け、紙を切つて獵騎・熊・犬・虎・鹿・兎・雉等の形を作り、旋機の上に結び付けると、風や火の力で、

ぐる〳〵と廻るから、その影がよく燈面に映るのである。影燈は三國故事に依つて造られたものであるらしい。

京城を始め各郡會地に於ては、年々四月の初頃になれば賣り物として、色彩絢爛な色々な形の燈を作つて、これを店頭に掛けて置く。又鸞・鶴・獅・虎・龜・鹿・鯉・龍・仙官・仙女……などの玩具を造つて賣るが、小供等は競つてこれを買ふのである。

（燈夕の遊び）

昔し京城では、平素夜禁といつて、夜鐘の鳴る後は街路に人の歩くことを禁じたが、四月八日の夜に限り、その夜禁を解くのであつた。この日は夕頃から夜遲くまで、城内の人々は

男女老少總出となつて、或は南北の山麓に登り、或は街路を歩き廻つて觀燈する。かくして不夜城の盛觀と雜踏とは大變なものであつた。

少年組は、それ〴〵燈竿の下に集まつて、楡の葉と粳米の粉を以て作つた甑餅や、蒸した黑豆や、芹なぎを供して、觀客を招待したが、是の日が佛辰であるから、素膳を以て饗應するといふ意からであらう。又水岳戲といつて瓢を盆水に浮べ、箒の柄を以て叩きながら、歌を唄ふこともあつたのである。

張遠隕志に依れば、「京師の習俗に、念佛する者は、豆粒を以てその數を識してゐるが、四月八日の佛辰には、豆を煮てから、それに鹽を薄く撒いて、路上の人を誘つて、これを喰はしめ、以て因緣を結ぶ」といつてゐる。豆を煮る風俗は、蓋しこれに倣つたものであらう。又帝京景物略に依れば、「上元の夕に小兒は鼓を叩き始め、曉に至りて止めるが、それを太平鼓といふ」と記されてゐる。惟ふに上述の水岳戲とは、この太平鼓を意味したものであらう。佛辰を以て燈夕としたから、或はそれを轉用したのではなからうかとも思はれる。

然るに四月八日の夜に、燈火を點じて、燈夕としたのは、高麗の中葉以後からである。これに就ては高麗史の中より左の一節を引用する。

「正月の十五日になれば、宮中及び都城は勿論、その他鄉村の到る處で、二日間の夜を續けて、燈に火を點じてゐたが、崔怡（高麗朝中葉時代の宰相で大勢力家だつた）が、始めて四月八日に點燈することに改めたのであつて、上元（正月十五日のこと）の節に點燈する習例は、その時代より廢れたのである」云々。

而して高麗仁宗時代の名將金富軾の燈夕詩に、

「城闕沈嚴更漏長、燈山火樹璨交光。綺羅縹緲春風細、金碧鮮明曉月涼。華蓋正高天北極、玉爐相對殿中央。君王恭默疎聲色、弟子休誇百寶粧。」

とあり、又高麗明宗時代の文士、雙明齋李仁老の燈夕詩に

「電鞭初報一聲雷、春色先凝萬歲盃。銀燭影中寒漏永、玉簫聲裏暖風催。仙桃帶露枝偏重、瑞莢含烟葉盡開。聲路月明絲管沸、翠眉爭唱紫雲廻。」とある。

蒸餅

この餅は四月の食用となるので、年々この月になると、餅賣りの女商ごもは、これを各家に賣り廻るのである。餅を造るには、粳米の粉に小量の水と酒を注ぎ、捏ねて溫室に一夜間置くと、それが醗酵して、外面が鈴形のやうになるが、その上に棗や石茸を細く切つて粘付し、蒸したる上四角形或は菱形に切るのである。これに蜂蜜又は砂糖をつけて用ゆるが、その味は非常にをいしい。又この餅には青と白との二色があるが、青いものは、當歸といふ藥草の葉を入れたものである。

花煎と魚菜

花煎とは黄色の薔薇花を粳米の粉に拌ぜ、月形に捏ね、油で揚げたものであるが、これを一に油煎ともいふ。魚と菊の葉・葱・石茸・鮑・鷄卵等を絲の如く細く切り、互々に混合し

て、これに醋醤油を掛けて食用する。これを魚菜といふ。

芹葱膾

芹と葱を湯にてよく洗ひ、芹一莖と葱一莖を合せて、唐辛の形のやうに捲き、これを唐辛の醋醤油につけ、肴或は食膳の兼用とするのであるが初夏の新鮮味である。俗にこれを食へば、コレラ等の傳染病に罹からないといつてゐる。又葱を羹にして食へば、感冒を退けるとの說も傳はつてゐるが、惟ふに葱は消毒性があるからであらう。

鳳仙花の指染

四月になれば、少女等は鳳仙花を摘り、燒明礬と調合して、指の爪を染める。その爪の赤くなるのを樂みとするのである。五行說に依れば、赤は鬼を退けるものとなつてゐるから、鳳仙花を以て爪を赤く染める習俗は、辟邪するとの意味から出でたるものであらう。

熊山神祭

これは慶尙南道の熊川邑に於て行はれてゐた風俗である。その邑の人は、毎年四月になると、或る吉日を擇び、山上にある熊山神堂より、神さまを迎へて邑内に入り下山式を行ふのであるが、この祭を行ふには大勢の人が集まり鼓を叩き鐘を鳴らしながら、雜戯を以て祭るので、遠近を問はず、その四方から無數に人が集まる。而してこの祭が終れば、その神さまを熊山神堂に奉還するのである。又十月にも同樣の祭を行ふのであるが、これは國祖檀君三世を祭る遺風である。この風俗に就ては、輿地勝覽の熊川縣祠廟條に記されてゐる。

（染指の花仙鳳）

五月

五日

この日を端午又は天中節といひ、年中三大名節の一（正朝・端午及び秋夕を三大名節といふ）となつてゐるので、京鄉を問はず、各家では端午茶禮といつて、この日の早朝種々の御馳走を家廟に供へ祭を行ふのである。この日、男女ともに鮮衣新服を裝ひ、相集まつて樂しむことは、元日に次ぐ有樣である。この日に行はれる主なることを列記すれば、左の通りである。

一、菖蒲湯及び菖蒲簪　年々この日になれば、女子及び男女の小供達は、皆菖蒲を入れて煎じた湯で頭髮を洗ひ、又菖蒲の根を採り、よく洗つて簪を作り、それに「壽福」の二字を彫刻し、又臙脂といふ朱でその端を塗り、これを頭髮に挿すのであるが、それは邪を退けるとの意味である。若い女達の間によく歌はれてゐる歌謠に、

小藪にのびた　若竹よ
さまに逢ふたら　言ふてくれ
乘りたくもない　花の輿
はめたくもない　金指輪
越したくもない　峠を越へて
嫁に往つたと　言ふてくれ

×　×

この世で逢へぬ　緣ならば
死んで菖蒲に　生え變はり
五月なりや　端午日に
沐浴の桶で　また逢はう。

と云ふものがあるが、これから見ても、朝鮮の女子が端午の日に、菖蒲を如何に愛用するかを推察されるであらう。

大戴禮には、「五月五日には、蘭の湯を以て沐浴する」といつてある。又歳時雜記には、「端午日に菖蒲と艾を用ひ、小人形或は葫蘆形を作つてこれを佩び、依つて辟邪をする」といつてゐるが、惟ふに菖蒲湯にて頭髪を洗ひ菖蒲の根を挿す風俗は、蓋しこれに由つて傳はれたものであらう。

（鞦韆戲）

これは端午の遊戯中最も主なるものであるが、年々この日になれば、都鄙といはず到る處に於て、楊柳大樹の枝に索をかけてブランコを作り、若い男女が盛に鞦韆の戯を演ずるのである。元來女子の遊戯であるが、平素閨にばかり蟄居する朝鮮の女子として、この遊び振りは極めて活潑であり、又最も詩的情緒に富んだも

二　鞦韆戯

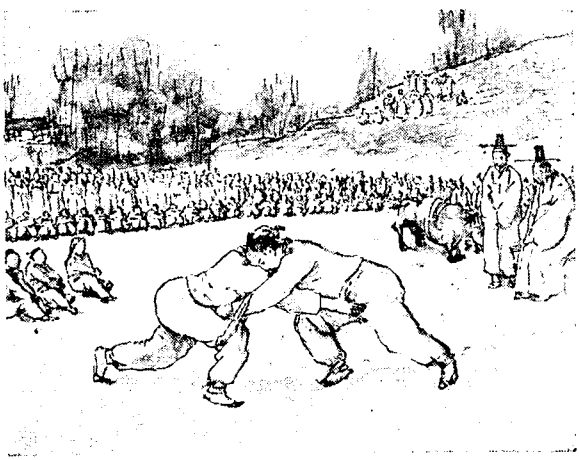
のである。綠陰茂げる間に於いて、色彩華やかな服裝をした若い女子ごもが、鞦韆の上で燕のやうに、飛揚する樣は全く仙戯のそれの如く、古詩の「非天非地半空中、青山綠水自進退。形如二月落花來、容似三月飛去燕。」を現實に描き出すものである。鞦韆こはブランコのことで、これを朝鮮語でユネ（Geu Nai）といつてゐるが、昔から最も盛んに行はれてゐるのは關西地方であつた。今も猶ほ平壤の端午遊びは、最有名なものである。こゝに李朝正宗時代の大文章家、石北申光洙の、平壤端午の詩を掲げて見やう。

青苧裙和白苧衣、一時端午著生輝。桐花別院鞦韆索、推送空中貼體飛。
村女紗裙玉指環、天中祭罷大城山。夕陽長慶門前路、皆著深々荻笠還。
桃髮鶴額粉紅裳、列侍輕盈時體粧。爭趁雙飛白蝴蝶、石榴花下捉迷藏。

三　角　戯　角戯は太古時代より、國内到る處で、行はれてゐたものである。京城では昔から、毎年端午節になると、元氣ある青少年達が、南山の倭場と北山の神武門の後に集まつて角戯會を催し、少年は少年と、壯年は壯年と、それぞれ勝負を試みるのであつた。田舍では、今も猶盛んに行はれてゐるが、京城では近頃は殆んど廢れてゐる。その遺方は各石脚を

二尺の布でゆるやかに括り、兩人相對して跪坐し、右の手で相手の腰を攫み、左の手で相手の右脚に括りたる布の端を取つて、一時に起立し、互に拮抗し、倒れた方が負けとなるのである。

角戲の遣り方には、內局・外局・輪起などの方法がある。卽ち內局とは、一方の脚を、相手方の兩脚の間に入れて掛け倒さうとするものであり、外局とは、一方の脚を以て相手方の、兩脚中何れかを、外から掛けて倒さうとするものであり、輪起とは、兩方とも抱き合つたまゝで、相手を突然一時に擲ち倒さうとするものであるが、



（角戲）

就中一方が力强く且つ手早くして幾度も勝つと、それを都結局といつてゐる。支那では角戲

を高麗技又は撩跤といひ、朝鮮のそれと略ぼ同じ方法でやつてゐるが、それは朝鮮の角戲を倣つたものである。

朝鮮の角戲は、一種の兵術として、古い時代から行はれてゐたもので、朝鮮語で씨름(Ssi-Reum)といふ。禮記月令に依れば「初冬の月、武士に命じて、弓術・乘馬術・角力等を講ずる」といつてゐる。

四　端午扇　昔から李朝末期まで、毎年の端午節に、工曹から扇子を作つて宮中に獻納しこれを各重臣や近侍者に頒ち賜はつたのである。又各道伯（道の長官）及節度使以下の外官も、各其管内の所産品として、扇子を宮中に獻上し、且つ各大官や親戚知己にも贈つたが、これを節扇といつたのである。その扇子には、金剛山の一萬二千峯や花鳥などを畫いたものであつた。

而して一般の人々も、この日から扇子を持つことになつてゐるので、いはゞ五月五日は、朝鮮の扇子デーといつてよいであらう。扇子は、普通夏季に用ゐられるが、婚禮などの儀式に於ては、四季を問はず、遮面用として、必ず用ゐられる。而して新郎は青色、新婦は紅色

こ定まつてゐるが、新婦の用ゐる扇子は、斑紋ある竹の皮で骨を作り、それに紅色の絹を貼り、五色の眞珠を以て飾りつけたものである。又巫女及び倡優などは、歌舞をするときに、必ず扇子を手にするのであつて、扇子を日常所持品としてゐるが、多くは蘭・桃の花・蓮・蝴蝶・鷺・鶯・銀魚等の畫があり、且つ色彩鮮やかなものを用ゐる。

扇子には、僧頭・蛇頭・魚頭・合竹・斑竹・外角・內角・三臺・二臺・竹節・丹木・彩角・素角・廣邊・狹邊・有環・無環等色々の種類があつて、それの製り樣もそれぞれ異つてゐる。又色合は、青・紅・黃・黑・白の色及び、紫・綠・薄い黑の色などがある。普通は白・黑の二色こ、黑色又は黑色の漆ものを用ゐるが、特に青色は新郎又は青年、白は喪人又は年老者、その他の雜色は婦人及び兒童どもの持ちものこなつてゐる。純白色のものを白扇こいひ、骨に漆の塗つてあるのを漆扇こいふ。

又團扇こいふものがある。これは扇面が圓形で、且つ柄をつけたもので、色は種々あつて、男子の在家用品こもなれば婦女及び兒童の愛用品こもなる。又大形の團扇は、或は日光を遮るにも用ゐられ、或は室內に於ける蠅や蚊などを逐ひ拂ふ道具にもなるのである。蕉葉

の形にして、稍大なるのもあるが、これは富豪の一種の飾物に過ぎない。而して團扇の種類には、桐葉・蓮花・蓮葉・蕉葉……などがあり、柄は黑又は黃色で、漆を塗り、扇面には各種の色を以て、太極旗・花鳥、其他色々の模型を畫いてゐる。特に太極旗の畫あるものは、これを太極扇といふ。

五　天中赤符　端午節になると、各家では不吉のことを除くの意味で、朱で書いた辟邪文を門楣に貼りつけるが、これを天中赤符といひ、或は端午符ともいつてゐる。昔は觀象監（天文・地理・曆書等を掌る官署）から、毎年の端午日に、辰砂といふ朱で符を書いて闕内に獻納し、これを宮中の門楣に貼りつけたのである。その文意は、「五月五日の天中節に、上では天祿を、下では地福を得る。蚩尤の神よ、銅の頭・鐵の額・赤い口・赤い舌を以て、四百四病の魔を一時に消滅せしめよ、而して律令の如く急々にすべし」と云つたやうなものである。

李朝實錄に依れば『太宗十一年辛卯五月丙寅に、經師の業を廢しようとしたが果さなかつた。王が闕内の門戸に貼つてある端午の符を見て、「思ふにこれは、穰災の術であらうが、何

して、それを一定の式を以てやらないのか」と云はれたので、經師業の僧に問ふと、僧は「但だ授けられたので、實は符本がない」と答へた。王は「今後は書雲觀をして掌らしめよ、經師の業は廢したらどうか」と云はれたので、代言等は「此の僧等は本より正術ではないが、葬式の折その他に依賴して來る者が多い」と奏したので、沙汰止みとなつた』と記されてある。

而して詞或は像を貼りつけて辟邪としたのは、新羅時代から始まつたものであつて、古へよりの朝鮮固有の習俗である。卽ちこれは鼻荊郎及び處容郎の故事から遺し來つたものである。今これを證する爲めに、三國遺事から左の一節を引用する。

三國遺事の鼻荊郎の條に、『新羅第二十五代の舍輪王は姓は金氏、諡は眞智大王で、妃は起烏公の女、知刀夫人であつたが、大建八年丙申に卽位せられ、國政を料理すること四年に至り、王の荒淫に依つて政事が紊れたから、國人はこれを廢した。これより前に、沙梁部の庶女は、その容姿艶麗で、桃花郎と號してゐたが、王はこれを聞き宮中に召し、親愛せんとされたが、女は曰く「二夫に事へざるは、女の守るところなれば、萬乘の威ありへど

も、夫ある身を以て已むを得ない」といつて從はなかつたので、王が「殺したらどうか」と云はれると、女は「寧ろ市に於て斬られるとも致し方ない」といつて斷然と斥けた。乃ち王は冗談半分で「夫が居なかつたら、よいか」といはると、それは宜しいといふので、放還せしめられた。この年に王は廢せられて崩御された。その後二年立つと、彼の夫も亦死んだのである。或る夜、王は平素の通り女の室に來られて「汝は昔の約束を知つてゐるであらう、今は汝の夫もゐないから宜からう」と云はれた。女は輕々しく承諾しないで父母に告げると、父母は「君王の命を避ける譯には行かない」といつて、七日間同室せしめると、五色の雲霧が屋宇を覆ひ、香氣が室内に滿ち、七日の後に至つて王は忽ち消えてしまつた。女は孕娠してゐたが、産期に至ると天地振動し、こゝに一人の男子が生まれた。これを鼻荊と名づけたのである。眞平大王（第二十六代の王）はこれを聞き、驚異なりとして宮中で收養し、十五歳に至り差執事を授けられた。處が彼は毎夜逃げて遠方に往つて遊ぶといふので、王は勇士五十人をして、これを窺はしめると、毎夜月城（宮城）を飛び出して、西方の荒川の岸上に往き、鬼衆を率ゐて遊戯してゐる。曉に至つて諸寺の鐘が鳴

るこ、鬼衆は各々散去し、鼻荊も歸つて來るのであつた。而して王は鼻荊を召されて「汝は鬼衆を率ゐて、よく遊戯するこいふが、然らば今度は鬼を使つて、神元寺の北渠に橋を架けてはどうか」こいはれた。鼻荊は勅を奉じて、鬼の徒衆を集め、一夜の中に大きな石橋を架けた。故にこの橋を鬼橋こいつてゐる。また王は鬼衆の中で、人間社會に出現して國政を輔佐してくれる者があるかこ問はれたが、吉達こいふ者が適當だこいつて、その翌日、つれて來たので、執事を賜はつたが、果して忠勤無比であつた。當時の角干林宗は子がなかつたので、王は勅令を以て、その嗣子こされたが、林宗は吉達をして、興輪寺に門樓を建て、毎夜樓上に宿泊せしめたので、これを吉達門こいつてゐる。或る日、吉達は狐に化けて逃げたから、荊は鬼をして捕へしめ之れを殺した。乃ち鬼衆は鼻荊の名を聞いて皆怖れて逃走してしまつた。そこで當時の或る人は「聖帝魂生子。鼻荊郎室亭。飛馳諸鬼衆。此處莫留停。」この詞を作つた。都鄉の俗に、この詞を貼りつけて鬼よけこするのはこれが爲である」こ記されてゐる。而して處容郎の條は、正月十四日の行事中、處容俗のこに引用してゐるから、こゝにはこれを略する。

六　戍衣日　端午節を戍衣日ともいつてゐるが、戍衣（수리 Su ri）とは、朝鮮語で車（수레 Su re）のことである。この日は艾の葉を採つて、これを柔かに搗き、粳米の粉と混ぜて、車輪形の餅を造つて食用するが、俗にこの餅をスレ餅といふ。餅屋では節句餅として、これを拵へて賣るのである。

昔はこの日に、宮中より艾花といふものを作り、これを閣臣に頒賜したが、細き稈に絹織物の造花を結び付けてゐるのは、恰も蓼の穗のやうであつたといふ。金邁淳の冽陽歲時記に依れば、艾花に就て左の如く記されてある。

「從兄直學（直學とは官職の名で、金邁淳の從兄を云ふ）の宅に、先朝時代に、頒賜された端午艾花の一枝が、保存されてゐる。それはどんなに造られたものであるかといへば、木を削つて體としてゐるが、長さ七八寸、幅約三分位であり、木の半身以下は漸次狹少し、その尖端は簪のやうになつてゐる。又その半身以上の兩面には、菖蒲の葉を貼りつけ木の本體よりは長くして、葉と葉は相對してゐる。赤い紗布の造花が、葉の處に貼り付けられ、花瓣は上に向いて、半開或は全開してゐる。五色の絹絲を以て結び付けてゐるから、非常に華やかであり、又

滿散される心配もない。蓋しこれは宮中の故事であるが、最初何に起因したのであるかは詳らかでない。思ふに名物篇に記載されてゐる蒹艾・長命縷等の類であるらしいが、その材料中に所謂艾そのものが、見附けられないのは、不可思議といはざるを得ない。……」云々。

七　艾及び益母草の採取　毎年端午日の午時（正午）に、艾と益母草を採り、乾して藥用とする。艾又は益母草は、漢藥に多く用ゐられるもので、傳つてゐるところに依れば、それは五月五日の午の時に採つて、陰乾したものでなければ、藥用にならぬといつてゐる。今も猶ほ田舍の人々は、年々この日の午時頃になると、方々で艾や益母草を、盛んに採取するのである。

八　棗樹を嫁すること　毎年の端午日になれば、田舍の農家では、棗の樹を嫁らせるといつて、棗樹の兩枝の間に、丸い小石を挿しこむ。これは五月五日の午時に、棗樹を嫁らせば實を結ぶことが多い、といふ傳說から出でたる風習である。

九　醍醐湯と玉樞丹　昔はこの日に、內醫院（宮中の醫藥を掌る官衙であるが、或は太醫

院こもいふ）より、醍醐湯を造つて宮中に獻納した。これは烏梅肉・草果・砂仁・白檀香などの細末に、蜂蜜を入れて煮た清涼劑である。

又玉樞丹と稱する金箔塗りの丸藥を製して獻納するが、宮中ではこれを各近侍に頒賜するのであつた。それを五色の絲で穿ち佩用すれば、厄除けになるといつてゐる。惟ふにこの佩丹俗は、長命縷・續命縷・辟兵繒等の類であらう。

一〇　烏金簪の祭

これは昔、江原道三陟郡に行はれてゐた習俗であるが、邑内の人は烏金の簪を小函に入れて、郡の東隅の大樹下に安置し、毎年の五月五日に、官民共同立會の下にこれを取り出して、祭を行ひ、祭が終ると、翌日元の處へ奉還するのを例としてゐた。傳はつてゐるところに依れば、高麗太祖時代の遺物だといつてゐるが、何故にこれを祭るのか、その意義は詳でない。故人の遺事を考査して見れば、烏金簪はたつた一つのみであつたのに、金孝元はこれを火中に投じ、丁彦璜は石室に閉ぢたといひ、又正宗時代の蔡濟恭はこれに就ての歌を作つてゐる。これに依つて案ずるに、烏金簪目體はなくなつても、邑人の心的信仰は除けなかつたから、その後も續けて祭つたのであるらしい。こゝに參考の爲めその

記事を引用して左に掲ぐる。

省庵金孝元の遺事に依れば、「公が三陟宰の時代には、何よりも民政の革新を急務としてゐた。邑内に一本の金の簪があつたが、新羅時代から傳はつたものとして、これを緊重に封緘して城隍堂に藏し、居民は神明の如くに信奉し、邑村の總ての事は、必ず禱告して後に行ふのであつた。故に巫覡は毎日これに奔走し、幾百世代を經て、尙ほ人民の惑ひは深くなるばかりで、その害毒は到底救へなくなつてゐる。公は憤然と廓清の決心を起し、日を擇んで祭料を供へ士人の强い者若干人を招き、親しく淫祠に往つて金の包裝を破棄し、これを火中に投じてしまつた。時に新任の官が親しくこれを祭るので、村閭の會衆が大變であつたが、これを見て大に吃驚し、直ちに何かの災難が起りはせぬかと恐怖してゐた。然るに公は平然として、堂宇を掃除せしめ、城隍の位牌をその中に移安し、冠服を整へて親しく祭祀を行つたので、觀者は悚然として、歎服せざるを得なかつた。……」とある。

眉叟許穆の記言に依れば、「烏金簪はその由來甚だ久しいので、その始を知り得ないが、毎年の五月五日に、群巫を聚めて三日間大祀を行ふてゐる。儀式の一切は戶長(郡の吏員)が

主管するが、祭祀を始めるに先立つて、大いに忌み避くるのである。この時は旅客を泊めない、又喪家をして泣き聲を制止せしむる。祭祀に從事する數人の者は、福を受けんとして、爭つて財物を散じてゐるが、若し誠意が足らなければ、殃咎が立ち處に至るとして、戰々兢々たるものであつた。處で府使丁彦瓚はその祠を禁じ、且つその簪を石室の中に閉ぢてしまつた。」といつてゐる。

又蔡濟恭の樊岩集に依れば、三陟烏金簪歌に「烏金簪は、高麗朝より傳はつたものといつて、州の人はこれを尊んで祀神とした。叢祠は古城の陰げに立てられ、每年の五月五日に、簪神が出動するとて、爭ふてこれを祝る。老巫は彩衣を着けて先導をなし、大鼓廣扇を以て翩々と舞ふ。三陟府内數百の民戸は悉く俯しない者はない。笙簫の合奏が忽ちに斷ち、又忽ちに續く、巫が簪の代言をする。卽ち左の如くいふ」と記されてゐる。

爾の家の食口は凡そ幾人ぞ、
吉凶禍福はたゞわれの權限にある。
愚なる民よ！

紙布・米粟・金錢を獻納するに惜む勿れ。
あー烏金簪よ！
人の厚施を受けて將に何を以て報ゆるか。
皇天の神は上にゐてこれを俯瞰する、
汝は恐らく不安に包まれるであらう。
病人は療りを求め、
貧しき家では富みを求む。
爾の責任益々重くして、
われ却つてこれを憂ふ。
簪よ！　簪よ！
むしろ祠神にならない方がよかつた。
神を溝壑に棄てたら、
胸底の煩悶はなくなるだらう。

一一　三將軍の祭　慶尙北道の軍威邑内では、郡の西岳にあつた新羅將軍金庾信祠を、俗に三將軍堂と稱へてゐる。年々五月五日になれば、縣の首吏が多數の邑人を率ゐて、驛の馬に乘り旗を先頭にして、鼓を打ち鳴らしながら、神を迎へて村閭を步き巡るのであつた。これに就て許樞の詩に「人言古將主西城、遺俗于今祀事明。每歲無違重五日、堅旗槌鼓慰神情」とある。今はこれが行はれてゐない。

一二　宣威大王の祭　咸鏡南道の安邊郡では、鶴城山にある霜陰神祠を、俗に宣威大王及び其の夫人の神といつてゐるが、每年の端午日になると、邑内の人々は霜陰神祠に至り、宣威大王の神を迎へて、鉦や鼓を鳴らしながら、祭を行つたのである。

一三　城隍神祭　古へより年々五月五日に、到る處で城隍の神を祭つたのであるが、慶尙南道固城地方では、每年の五月一日から五日に至るまでの間に、土民が兩隊に分れて、神像を載せ彩旗を立てゝ、笛を吹き樂器を打ち鳴らしながら村閭を巡廻するが、人々は酒饌を以て爭つて祭り、儺人が皆集まゐて色々の戲劇を演ずるのであつた。又地方に依つては、必ずこの日に行はず、三・四・五月の中に、或る日を擇んでこれを行ふこころもあつた。成俔慮

の白堂集に依れば、楊口東軒と題し、城隍神祭に就て、祭を迎送する詩を作つてゐるが、卽ち左の如くである。

迎神曲　清晨鼓笛花山阿、端午城隍降人家。競扶風馭相傳芭、雅鬟萬袖紛婆娑。老巫變顏降神語、穀朝鬷邁同傾口。漉醪炊黍自來去、歸途月墨長林阯。滌洧渙々紅芍藥、邂逅相逢爭戲謔。偶因神食醉爲歡、不必更憑靑鳥約。

送神曲　雲林蒼翠多喬木、約擡芝梁編小屋。坎々伐鼓振幽谷、茅縮淸醪宰黃犢。爭膜萬指折百穀、淫祀年々自成俗。三日醉歡猶未足、又向豪門來糶穀。紙錢燒破風生寒、渺々霓旌不可攀。欄街兒女紛聚觀、送神萬騎還松楷。

而して城隍の神祠は、各地の峴嶺のある所にあつた。或は堂宇を建てゝ祠とし、或は砂石を壘し、或は叢林古樹の下に石壇を作つて祠と爲し、これを祭つた。祠には小いキレや紙片又は左繩を掛けてあつた。惟ふにこれは馬韓時代に、鬼神を祭るに、蘇塗（塔のこと）を立て大木を建てゝ、以て鈴と鼓を下げてあつた遺俗であらう。そは兎も角、城隍神は巫も必ず祭るから、俗にはこれを淫祀といつてゐる。處がその神を究ふるに、これは蓋し國都・州・

府・郡・縣の鎭山（都邑の後方にある山のこと）の神祇である。故にその神號には必ず護國の二字が加へられるのであつた。今日は殆んど廢れてゐる。

一四　大嶺山神の祭　これは江原道の江陵邑に行はれた風俗であるが、昔は毎年の五月五日になると、邑の人等は旋蓋花環等を持つて大嶺に至り、神を迎へて邑内の官衙に奉安し、諸戲娛樂を以てこれを祭つたのである。神に喜びあれば旋蓋が終日倒れることなく、その年は豐作となり、若し神が怒れば、旋蓋が倒れるが、年中に必ず風水の災害あつて、凶作になるとの說が傳はつてゐるので、人々は務めて神を喜ばせようとするのであつ

（城隍神祭）

た。それは新羅將軍金庾信の神だといつてゐる。傳はつてゐるところに依れば、金將軍が少年時代當地へ來り、山神より劍の妙術を敎へられ、禪智寺に於て、九十日もかゝつて寶劍を鑄造し、月色を凌く程光るこの寶劍を佩用し、嬶々たる武功を收めて死し、嶺の神となつたが、その靈感が著しいので、これを祭つたといつてゐる。

太宗雨

五月十日に雨降れば、農家では豐年の兆といつて非常に喜ぶ。俗にこの日の雨を太宗雨と稱へるが、それは太宗大王(李朝第三代の王)の誕辰から出てゐる。王は在位二十二年の間、神を敬ふこと深く、民を思ふこと赤子の如く夙夜倦怠の色がなかつた。王の病めるとき、偶旱魃があつて、王は非常に憂慮され、「余は上帝に雨を乞ふて、我が民草を惠むべし」と仰せられて、終に薨御になつたが、丁度その時沛然として雨が降つた。そしてその後年々此の日になると、必ず降雨があつたので、時の人王の德を永く記念する意味にて、五月十日の雨を太宗雨といつたのである。今も猶ほ農民は、此の日に雨降らずして旱魃が續くと、「獻陵王は我我の小民を顧みないか」といつて、非常に心配するのである。

六月

流頭日

六月十五日を流頭と稱へ、毎年この日には、都鄕を問はず人々は、清流又は瀑布に於て頭髮、身體等を洗ひ終日の清涼を取るのである。かくすれば不祥を除き、暑氣に中らぬと信ずるからである。又文人などは流頭宴といつて、酒肴を携えて山間又は水邊の景致を訪ねて、詩を吟じながら一日の清遊を試みる。これは新羅時代からの風習である。高麗熙宗時代の文人、金克己集に依れば、「東都（新羅の首府）の俗に、六月十五日に、頭髮及び身體を東流の水に洗ひ、不祥を除け去る。そして喫飲を山亭で張るが、これを流頭宴といふ」と記されてある。而して流頭日に關する民謠として、次の如きものが一般に歌はれてゐる。

六月なりや　流頭日
乾坤にも　心ありて

この吉辰を　定めしや
紅爐熱りて　金石も
溶けんばかりの　暑さなり
如何に暑さの　苦しとて
裸體露髪し得べきや
竹杖芒鞋　單瓢子
涼を求めて　われ行かん
萬丈瀑布　落つるところ
音に聞へし　驪山にて
飛流直下　三千尺
これぞ　古人の詩にあり
滄溟曲に　胸迫り
歌聲追ひて　探め往けば

（頭　　流）

巖陵灘の　崖の上に
釣竿垂れし　翁なり
陽も傾きて　木の枝に
鳥も歌はずなりたれば
われも舟漕ぎ　歸り行かん
荒れ果てたれど　我家なり
清風そよぎて　頰を吹き
明月庭に　照り滿てり
何を貧しと　歎かんや
王者の富も　吾にあり
父母だに　居まし給ひなば
如何に　王者の富めるとも
我がよろこびに　及ばじを。

この日の朝、各家では小麥の粉にて饂飩及び餅を作り、甜瓜その他の新果と共に、これを家廟に供へて祭祀を行ふのである。これを流頭薦新と云ふ。又農家では、年中農作物のよく稔るやうにとて、農神をも祭るのである。それから一家團欒の裡にこれを食ふが、此日の食物として、主なるものを列記すれば、大概左の如くである。

一　流頭麵　この日は、小麥の粉にて麵を造り、男女老少共にこれを食ふことになつてゐるが、俗にこれを流頭麵と稱する。傳はれるところに依れば、流頭日に小麥の麵を食へば夏中暑氣に中らぬといふ。昔は小麥の粉を以て珠形の如く造り、これに五つの色を染め、三枚づつ重ねて、色絲にて穿ち、これを佩び或は門柱に掛け、以て厄拂ひとしてゐた。

二　水團と乾團　水團とは卽ち水團子のことである。粳米の粉を蒸して細長く搗き、珠形の如く切つて、これを氷水に浸し、蜜と混和して食用する。又乾團といふのがあるが、これは水に浸さないで食べるから、かく名づけてゐる。この餅は、糯米の粉を用ゐて造ることもある。

三　連　餅　小麥の粉に小量の水を注ぎ揑ねて、これを薄く擴げ、油に揚げるか、又は赤

豆・胡麻・蜜などを混合したものを餡にして、種々の形に捲き包み、これを蒸して食用するが、俗にこれを連餅と云つてゐる。

三伏

千歳暦に定つてゐる初伏・中伏・末伏を、總括して三伏といふ。伏の日は、炎暑殊に酷いので、山水のよい所に往つて、詩を作つたり、盃を交はしたり、又は濯足と云つて、時々清流の水に足を浸しながら、一日の暑を忘れるのである。或は妓生を同伴して川邊に行き、江上に船を浮べて魚釣をしたり、妓生をして歌を唄はせたりして、一日の清遊を試みる。而して伏の日に、麥飯と葱湯を食へば、退暑の效ありとて、田舍の人々はこれを盛んに食ふ。又伏の日には、必ず赤小豆と粳米を以て造つた粥を食ふことになつてゐる。これも退暑辟邪の意味であらう。

藥水飲み

三伏中は都鄉を問はず、男女老少共に藥水を盛んに飲用する。因みに夏の中、山間の藥水ある所には、四方から大勢の人が雲集するのであつて、市の如き盛況を呈する。藥水は山間から湧出する水で、清澄なものもあり、稍紫色を帶べるものもある、これら昔から藥水と稱するものは、大抵ラヂウム炭酸カリウムを含有してゐるが、これを飲めば、神經衰弱・消化不良・淋病などの病氣に非常に、効顯があると云ふ。これは現代の醫學上から見れば、何等理窟に當らないやうではあるが、實際昔からの有名な藥水は、これを飲むと神經衰弱や消化不良などには、少からざる効能があるのである。

（藥水飲み）

藥水は到る處にあるが、その中でも最も有名なものとして、咸鏡南道安邊郡の釋王寺藥水、同じく三防の藥水、平安南道の江西藥水などがある。

避暑

六月の暑中には、三々五々と組みを爲し、山水綠陰の地に避暑するが、或は山間に至つて藥水を飲み、或は海邊に至つて海水浴をするのである。殊に安邊の釋王寺・三防の藥水浦・元山の明沙十里の濱・仁川の月尾島などの勝地には、年々暑中に四方から雲集する避暑客で、大雜沓の盛況を呈するのである。

鷄蔘湯

夏の間鷄蔘湯を多く飲用すれば、元氣が非常によくなり、且つ年中如何なる疾病にも罹らないとて、人々はこれを盛んに飲用する。鷄蔘湯とは、卽ち鷄の腹に人蔘と糯米一勺及棗四五箇を入れて煎出した液であるが、富者はこれを殆んど毎日服用するのである。

小麥麵

小麥の粉を以て麵を造り、鷄煎湯に調和して食用する。これを小麥麵と云ふが、多くは、午食又は夕食とするのである。又南瓜を細く切り、小麥の粉に入れ混ぜて、これを油に揚げて食べるが、何れも暑中に適する料理である。

賜氷

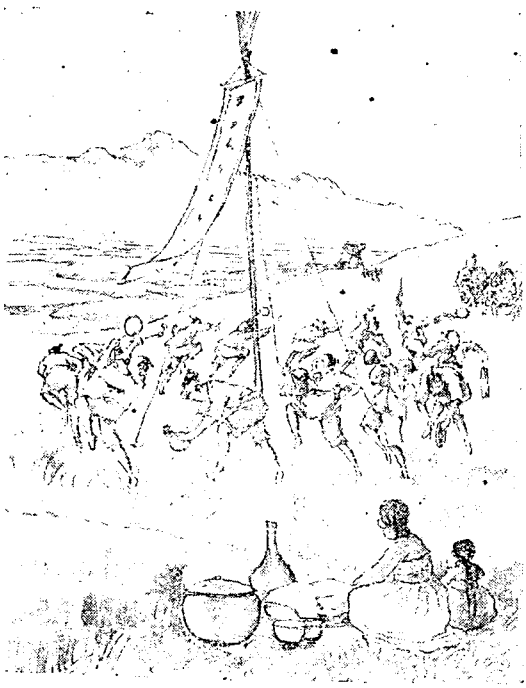
昔は宮中から、暑中の見舞として、在京の大官や各部署に氷を頒賜される例があつた。年々六月中旬頃になると、木の札卽ち氷票を頒賜されるが、その札を持つて藏氷庫に往つて、氷を受領するのであつた。

農樂

これは古へより、半島の中部以南地方に行はれてゐる習俗にして、農繁期に盛行するもの

である。卽ち村々の農夫達は、農樂なるものを組織し、隊員なるものは團結して、隊員相互の農作を順ぐりに、助けて往くのであるが、早朝田畑へ出るとき、日暮れ歸へるとき、又は田畑から田畑へと移るとき……に農旗を先頭にして、小鼓・笛・銅鑼等の樂器を打ち鳴しながら、

ヤア世の人　國の人
われの話を　聞けよ



（農　樂）

天下の勝地　我が朝鮮
到るところ　片々玉土。
オル　レルネ　サンサヂヤ
×　×
高いところに　畑を拓き
低いところに　田を作る
廣い天下に　聞えも高い
農産國とは　この國だよ。
オル　レルネ　サンサヂヤ
×　×
よろづの民の　命なる
糧を作りて　世に送り
天下の大本　定むるも

農を措きて　他になし。

オル　レルネ　サンサヂヤ

×　×

傳へて來た　農理の上に
種や農具を　なほ選びて
時を違へず　種蒔くならば
秋にや實るよ　二十位も。

オル　レルネ　サンサヂヤ

×　×

雀啼いたら　起きなきやならぬ
農具を揃へ　牛を牽いて
こなり近所の　友達誘うて
野良へ出るときや　農夫歌よ。

オル　レルネ　サンサヂヤ

×　　×

月出る頃　仕事を終へて
歸りや妻子が　出て迎ふ
土によごれた　體を洗ひ
食べる麥飯　味もよい。

オル　レルネ　サンサヂヤ

……と、農歌を唱へ踊を作しつゝ歩くのである。これを俗に農夫ノリ又は農樂と云ふ。これが目的は、專ら農苦の慰安にあるが、又一方に於てはお互の情誼を篤からしめ、仕事の能率も亦倍加し得るのである。處によつては、春の田畑の鋤かへし頃から始まり、秋の收穫期に至るまで續くのであるが、便宜上年中耕耘の最も盛んなる六月の行事とした。

惟ふにこの風俗は、大昔三韓時代に於て、百姓達が農功の盛んなる時節に、歌舞飲酒を以て樂みとした、その遺風であらう。

七月

七日

この日を七夕といひ、當夜未婚の女子は、牽牛・織女の二星を拜して、裁縫の上達せんことを祈り、文人は盃を交はしながら、この二星を題として詩を作る。傳へられるところに依れば、牽牛星と織女星は、銀河といふ天河の東西に分れ、相望んでゐながら橋なき爲に相逢ふことが出來ないが、年々この日になると、烏鵲の橋にて銀河を渡り相逢ふとの說がある。この日烏鵲は、銀河に橋を架けようとして悉く上天し、地上には一羽も居らぬと傳へられてゐるが、李朝中宗時代の文士慕齋金安國の七夕詩に

「鵲散烏飛事已休。一宵歡會一年愁。淚傾銀漢秋波濶。腸斷瓊樓夜色幽。錦帳有心邀素月。翠簾無衣上金鉤。只應萬刼空成怨、南北迢々不自由。」

とある。又荊楚歲時には、

天河之東。有織女。天帝之子也。年々織杼勞役。織成雲錦天衣。天帝憐其獨處。許嫁河西牽牛郎。嫁後。遂廢織紝。天帝怒。責令歸河東。唯每年七月七日夜。渡河一會。

と記されてゐる。而して俗に當夜の雨を喜びの涙といひ、翌朝の雨を別れ惜みの涙と稱する。

この日は都鄕といひ、衣裳の蟲干を曝衣といふ。

（曝書曝衣）

はず、各家では衣裳や書籍を日光に曝して、蟲の害を防ぐのであるが、これは古へよりの習俗である。富家は綾羅綢緞の美衣を掛け出し、儒家は山積の陳書を出し列べて、日光消毒をなし、蟲害を防ぐと共に、その多藏を誇る。書籍の蟲干を曝書

十五日

この日を百種日、百中節又は中元といつてゐる、僧侶等は毎年此日になると、各寺院に於て、齋を設けて、佛に供養をする。昔、佛教の隆盛であつた新羅・高麗の時代には、この日に盂蘭盆會を設けて、僧侶・俗人共に、佛の供養を盛んにするのであつたが、李朝になつてから後は、民間に於て供佛する風俗は殆んどなくなつて、たゞ僧侶等が寺院で齋を設けるのみとなつた。盂蘭盆經を按ずるに「比邱（僧侶のこと）は、五味及び百種の果物

（佛　　供）

を具して、盆中に盛り、以て十方大德（佛のこと）に供養する」といつてゐる。

而して盂蘭盆とは梵語の音譯にして、倒懸を救ふの意味である。卽ち七月十五日百味の飲食を盆に盛り、諸佛に供養し、以て冥土に於ける亡靈の倒さに懸けられたる苦を救ふとの意である。惟ふに百種日とは百味の飲食物を指したのであるらしい。

俗に七月十五日を亡魂日といひ、閭閻の小民は、月光の明い是日の夜に、蔬菜・果物・酒飯を具へ、亡親の魂を招くのである。李朝宣祖時代の文士東岳李安訥の詩に「記得市廛蔬果賤、都人隨處薦亡魂」と吟じてゐる。蓋しこれは盂蘭盆會の遺風であらう。

南鮮地方では、この日を百中市と稱して、市人は市場を開き、且つ角戲會を催すので、各市場には、その附近から多くの群衆が集まり、大雜沓の盛況を呈するのである。角戲は二部に分れ、各々選手を雇ひ來り勝負を試みるのであるが、優勝者には賞として牛を與へる。その費用は負けた方の負擔となる。

草宴

これは、卽ち農夫慰勞宴のことであるが、昔から最も盛んに行はれたのは、隍尙道の地方であつた。今も猶ほその地方では、年々七月になると、各部落に於て月内の或る晴れ日を選び、その部落の農夫總出となつて、山又は大樹の下に集まり、酒食を共にしながら、相互に農苦を慰める。醉へば銅鑼や鼓なごを鳴らしながら、心ゆくまで一日を愉快に遊び過すのであるが、俗にこれを草宴といふ。而してこれには會費を集めるのでなく、各家で各々その分に應じて、酒食及其他種々の御馳走を作つて、提供することになつてゐる。

（草宴）

女子の協同績麻

これは古へより、半島の中部以南地方に行はれてゐる習俗である。卽ちお互の怠慢を戒め、能率を增進するが爲めに、人の仕事を順ぐりに、相互協助するこさであるが、各部落での麻織りに從事する女子達は、年々七

(女子の協同績麻)

月中旬頃から、毎夜二十人も三十人も一定場所に集まり、面白い話をしながら、その麻織りに用ふる絲を績むぐのである。そしてその夜中に績いだ絲は、全部その中の或る一人に與へ、毎夜かくの如く順ぐりに與へて行

くのである。各家庭にて一人々々が各別にやつては、なか〳〵時日がかゝり、能率も進まぬが、かやうに多勢な人が協同して、面白い話をしながらするのであつて、仕事は知らず識らずの間に進んで、何時の間にか終るのである。若し、その組の中に、故なくして作業の時間中に缺席するとか、又は出席はしても、怠けて仕事を忠實にしない者がをると、直ちにそのグループから除外してしまふことになつてゐる。それ故に各自己の仕事を考へ、皆と一緒に交はる誠意を以つて、極力努力するのであるが、この協同して麻を績むぐ事を、朝鮮語で들이삼(Dulrai sam)といふ。

而してこれは古き新羅時代からの習俗である。輿地勝覽に依れば、「新羅儒理王の時代に、王は王都の六部を二部に分ち王女二人をして、各々その部内の女子を統率せしめ、七月十五日より、毎日各其部内の女子を集め麻を績がせて、八月十五日に至り、その成績を考査し、敗者より酒食を以て勝者を慰勞させたので、勝者はこれを誇りとして歌舞百戯をしたが、これを嘉俳と稱へた。その時、敗者中より一人の女子が起つて踊りながら、「會蘇々々」と歎辭の歌を唄つたが、その音調は至つて哀憐であつた。後の人はその音曲に依つて歌を作り、これを會蘇曲と名付けたのであるが、民俗は今もこれを行ふてゐる」と記されてある。

八月

上丁日

この日は八月の一番初めの干の丁に當る日である。毎年この日になると、儒生等が各地の文廟に集まり、祭享を行ふのであるが、これを秋期文廟釋典と稱する。その祭享の方式及順序は、二月の上丁日に行はれるそれと同樣である。

十五日

この日を嘉俳日又は秋夕と稱する。嘉俳日は朝鮮語で가위날(Kawenal)といつてゐるが、新羅儒理王の時代、麻績ぎの女子を、八月十五日宮庭に集めて、その成績を審査し、酒食を置いて、その勞を慰めたことがあつた。そのとき麻績ぎの女子達は、喜んで歌舞百戲をやつたが、これを嘉俳(가위—Ka we—)といつた。これが卽ち八月十五日を嘉俳日と稱する起

りである。この日は年中三大名節の一であり、尚又穀物は既に稔り、秋の收穫も遠からざるで、一時も休むことなく、苦勞したその汗の結晶たる新穀を以て、造つた酒食に醉飽して、樂器を鳴らしながら、あらゆる樂みを盡し、五月農夫八月仙の實景を演ずるのである。而してこの日に行はれ時節なので、田舍では最も重なる節句としてをる。男女老少共に、新しい衣服に着換へて、或は山に登り、或は野原に出で或は色々の遊戯をして樂みとする。又農夫などは、夏の間蒸すが如き曝陽の下ることを列記すれば、大體左の通りである。

（農夫の遊び）

一　茶禮及び省墓　都鄕こいはず、各家では新穀を以て酒・餅及び其の他種々の山河眞味を調理して、棗・栗・梨・柿・松の實……などの新果と共に、この日の朝、家廟に供へ祖先を祭るが、これを秋夕茶禮・又は八月薦新こいふ。若し新穀の未だ稔らないときは、月内の下丁日又は九月九日に祭るのである。而して月内の下丁日とは、八月の最終の干の丁に當るの日であるが、丁の日は神のよく奠を享くる日と傳へられてをる。こゝに於てか、丁の日によく神を祭る習俗がある。

又この日は寒食日と同樣に、省墓こいつて、祖先の墓地に詣でて禮拜をするのである。柳子厚集に依れば「卑賤丐人の人こいへども、皆父母の丘墓に參拜する」こあるが、蓋しこの日のことを、云爲したものであらう。而して墓地の雜草は、大抵秋夕の前に刈るのが例となつてゐるが、この日省墓の際に、これを刈ることもあるのである。これを伐草こいふ。

二　角戲　年々この日になると、田舍の各地では角戲を盛んにやるが、大規模の角戲會を催すときは、優秀者に賞として牛を與へるのである。これに就いての詳細は、五月五日の行

事中の角戯について詳記してあるから、こゝには略する。

三　龜戯　これは正月の行事中、獅子戯と類似せるもので、忠清北道の東北部及び京畿道の長湖院地方に、多く行はれてゐる。この地方では、毎年この日の夜になると、二人の男子が尻をつき合はの頸に當る所を、紐を以てつないで、數十名の農夫が、鉦や鼓を打ち鳴らしながら、これを

（龜戯）

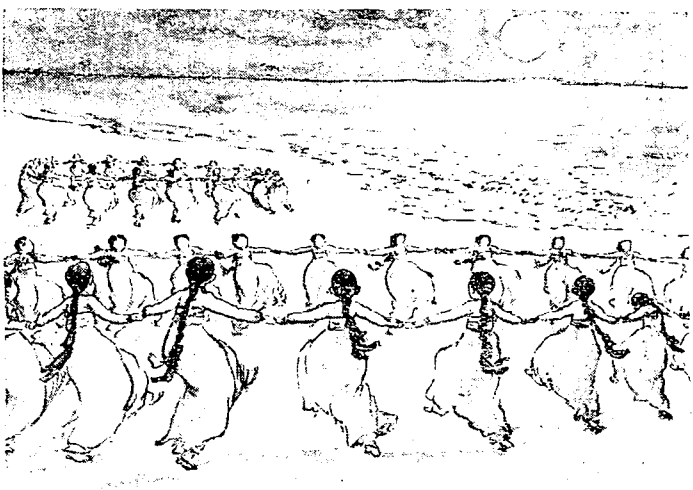
せて、うつぶしをしたその兩側に、又二人の男子がうつぶしになつて、その上に、黍の稈で編んだ筵をかぶせてから、其の筵を、藁にて龜の甲のやうに編み、龜の形を拵へる。そして前の男の頸、卽ち龜

引き村中を廻り、各家を訪れて「東海のお龜さんが、はる〴〵波を渡つて、こちの村に來たから、何かうまい御馳走をください……」と要求するが、各家ではその一行を門内に案内し、豫め用意した酒食を出して、振舞ふのである。これを朝鮮語でコーブクノリ――거북노리(Gubuk nori)――といつてゐるが、何時も淋しい農村の樂みとしては、惡いことではない。蓋し各家で彼等を御馳走することは、年中の農苦を謝する意味からであらう。

四　强羌水越來(カンカンスオルレ)戲　これは全羅南道の海岸地方に最も盛んに行はれる習俗であるが、その地方では、白晝を欺くばかりに明るい月光が、天地に滿つる是日の夜となれば、二十人・三十人又は四十人づつの乙女達が、群をなして踊りながら、强羌水越來(강강수월래(カンカンスオルレ)・Kang-kang Su woll rai)といふ歌を唄つて、くる〳〵と巡るのである。强羌水越來とは、卽ち强敵が海を越えて來るこの意味であるが、その起りは、傳へられてゐるところに依れば、今を距る三百三十餘年前、壬辰の役に、水軍統制使忠武公李舜臣が水兵を率ゐて、日本の豐臣秀吉軍と海上戰を行つたとき、一般の人々に敵愾心を注入すると共に、出征軍を應援するが爲

に、戰地附近の女子達が、數十人づつ群をなして山に登り、處々に火を放つて巡りながら、强光水越來の歌を唄つたことから起つたといはれてゐる。

而してそれから後は、その戰跡地附近の乙女達が、其當時を記念し追憶せんが爲めに、百物の成熟期であり、不寒不熱なるこの滿月夜を擇び、一つの年中行事として、强光水越來の歌を唄ひながら、躍り廻るのであつたが、それがだん〳〵廣まつ



（强光水越來戲）

て、全南一帶に傳はつて、今はその地方特有の風俗となつたものである。又ところによつては、正月十五日の夜にも亦同樣に行はれるのである。

五　照里戯　濟州島の習俗に、毎年この日になると、男女を問はず、總出動となつて歌舞會を催し、又左右の二組に分れて、繩引を爲し勝負を試みるが、若しも繩の中間が斷絶して兩組の人々が、共に地上へ顚伏されると、一般の會衆は拍手大笑をするのである。それを照里戯といつてゐる。又鞦韆及び鬪鷄の戯もやるのである。

六　牛まね戯　これは黃海道の東北地方に行はれる農夫の遊びであるが、この日の夕に二人の若い者が、尻を突き合はせて中腰をなし、藁で編んだ大きな蓆（これを網蓆といふ）をその上に被せ、一方の男は二本の短い棒を、一方の男は一本の稍長い棒を垂れ、恰も牛の角と尻ツポのやうに假裝するのである。

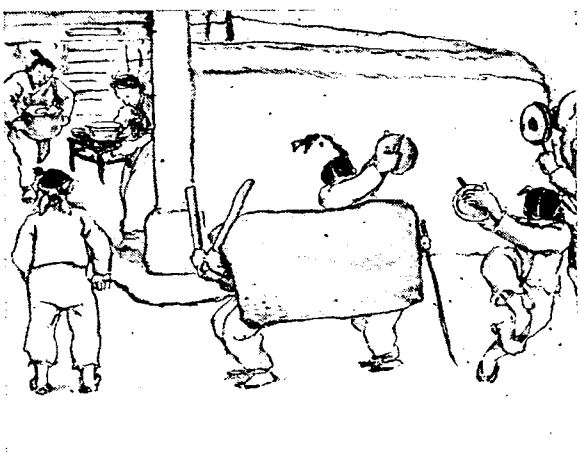
そして多くの若者どもは、これを牽き、夜更けまで村中を廻りながら、各家を訪れ、富裕な家の前に至ると、二つの短い棒（牛の角に當るもの）で、門の戸を打ち鳴らし、「お隣の牛

が飢へて來ました、何か御馳走があればください……」と唸り立てるが、その家では酒食を出して、その一行を饗應するのである。これはお正月にも同樣に行はれる。

路上の會見

これは全羅北道の南部地方に、行はれてゐる風俗であるが、卽ち永らく會へなかつた姻戚關係の婦人、多くは婚の母と嫁の實母が、相會はうとするときに行はれることである。

彼等は豫め或る日時を打合せて、お互に何か手土產を携へ、兩家の中間に當つてをる川の岸か、又は山嶺等を擇び、待合はせて會見



（牛　ま　ね　戲）

し、各々その携へ來れる御馳走を飲食しながら、心ゆくまで語り合つた後、歸りゆくのである。これを朝鮮語で中路보기(Chung no Boki)といつて、暖い春又は涼しい秋に行ふことになつてゐるが、多くは農閑期たる八月中に行はれるのである。

然しこれが何れの時代から始まり、如何なる事情から、起つたのであるかは、詳らかでないが、たゞ事實それのみを見ただけでも、如何に窮屈な禮儀を省き、煩雜な形式を避けたかを、充分に證し得るであらう。何時も忙しい農家に於ては洵に面白い會見方法である。

(路上の會見)

九月

九日

この日を重九、又は重陽といつてゐる。都鄉といはず、各家では菊花煎といふ餅を食べるが、菊花煎とは三月三日の花煎と同樣なもので、卽ち黃菊の花を採り糯米の粉に混ぜて作つた團子である。又柚子の實と梨を細く切り、蜜の水に石榴と松の實とを混合して飲用するが、これを花菜といつてゐる。

この日、人々は郊外に出でて楓を賞し、文士や畫家は酒肴を携へ、楓の名所や菊花のある所に至り、黃菊を酒に泛べて盃を交はしながら、詩を作つて吟じたり、畫を書いたりして一日の淸遊を試みるのである。而して李朝明宗時代の文士、古玉鄭磎の重陽詩に、

「世人最重々陽節。未必重陽引興長。若對黃花傾白酒。九秋何日不重陽。」

とあり、肅宗時代の文士農岩金昌協は、この月諸生と共に酒を携へて山に登り、

「臥病那能負菊觴。小廬扶我上高岡。森々萬木知霜氣。歴々三洲見夕陽。老去尚堪供節序。心期久已託滄浪。不須更問明年健。且較櫸前與短長。」

と吟じたのである。又民謠に、

九月なりや　重九日
千峯萬嶽　秋酣けて
山も衣を　脱ぎ更ふる
楓は　色を競ひてか
花と見まがふ　華やかさ
今日ぞ　三秋の佳節なり
われも杖引き　野に出でん
南山に立ちて　見下ろせば
地勢よければ　景も奇し
天高くして　地は廣く

天地の無窮を　知るに足る
はるか東に　聳ゆるは
一萬二千の　金剛峰
南遙かに　見渡すは
嶺南兩道の平野あり
西の方を　眺むれば
九月山の　千秋峰
白虎の方に巡り立ち
龍盤虎踞の　勢は
世を踏み碎かんばかりにて
首を北に　見廻せば
關北山川　横たはり
玄武の方に　位して

白頭の姿　嚴そかに
祖宗峰も　仰がるる
古往今來　人傑の
こゝに立ちしは　幾人ぞ
山間寂寞　人もなく
黄鷄白酒は　汲めねども
心ひらきて　吹く風に
いで　わが愁ひ　晴さなん
さあれ　哀しや　父母樣は
地下にゐまして　歸らぬを

といふものが、古へより一般に歌はれてゐる。

又農家では時候の遲れし爲に、新穀を以て八月の薦新を行はざりし場合には、この日に至り、新穀で調理した種々の御馳走と新果を、家廟に供へて祭を行ひ、その御馳走を飲食して

一日愉快に遊ぶのである。

山遊び

九月は菊花滿開の月であり、楓の當節なので、賞菊とか觀楓とかいつて、老年は老年、青年は青年、少年は少年、女子やうな風流客は頗る尠くなつたが、まだ年々この月になると、楓あり菊ある所には、人の山

（山遊び）

は女子で組みを作り、或は家族連で三月の賞春と同樣に、山遊野遊を盛んにするのである。これは古き新羅時代からの風俗で、近來は昔の

をなす事もあるのである。李朝英祖時代の文士、趙觀彬の九月登山詩に「丹楓千樹又萬樹。我行悠々水石間。不知天中白雲起。却疑山上更有山。」とある。

二十九日

この日は朝鮮文の創定頒布された日で、俗にカキヤ日（가갸日 ka kya Nal）又はハンクル日といふ。年々この日になると、京城を始め各地方に於ては、多數の人士が集まつてハンクル記念講演を爲し、又各新聞雜誌は筆を揮へて、これに關する記事や論文を滿載した記念號を發行する。ハンクルとは朝鮮文のことで、朝鮮語の한は韓、글(クル)は文の意味である。

ハンクルは、李朝世宗大王が卽位後二十五年癸亥冬に之を完製して、同二十八年（西曆一四四六年）丙寅九月二十九日に頒布せられたのである。世宗大王は、天地自然の聲があれば天地自然の文がある、とこの大理想を以て、多年苦心せられた結果、このハンクルを創作し、この日を以て、訓民正音といふ名稱の下に頒布すると同時に、文の公私を問はず、必ずこれを用ふるやう嚴命を下した。仍て發布されて以來一時は、君主の權力に依つて、廣く一般に

使用されてゐたが、その後世祖以來、燕山主の暴政等に因つて、この文字は現今に至るまで、四百數十年の間、莫大なる致命傷を受けて、眞にその使命を發揮し得ず、たゞ諺文として使用されることに止まつたのである。然るにこのハンクルが、最初から民衆の敎化・民生の福利・民意の暢達を、自己の使命として、生まれたものであることは、世宗大王が訓民正音を頒布すると同時に、宣せられたその序文に依つて明かである。卽ちその序文は左の如くである。

國之語音。異乎中國。與文字不相通。故愚民有所欲言。而終不得伸其情者多矣。予爲此憫然。所制二十八字。欲使人々見習。便於日用耳。

文字の組織が惡いといへば、そうかも知れないが、ハンクルは如何なる發音でも出來るのみならず、極めて簡便であり且つ合理的になつてゐる。如何に頭の鈍いものでも、二日間も習へば、充分熟達して、自由自在に書くことが出來る程、簡便容易なものである。

而してハンクルは、その文字の綴字法が縱書となつて、漢文や日本文のやうに、右から左へ行を進めてゆくのであるが、素より横書に變化すべき性能をも具有してゐる。これが横書

に變ずれば、縱書より尙ほ簡便になるべきであるから、近來これを提唱する者も頗る多くなつて來た。これは時機の問題であるが、何時か當然橫書に變化されるであらう。他の理由は別として、たゞ印刷上から見ても、實に橫書とする必要がある。今その橫書の一例を示せば、假にセウル(京城)を縱書では서울と書くのであるが、これを橫書にすれば、卽ち『ㅅㅓㅇㅜㄹ』となるのである。

世宗大王に於て訓民正音として、創作頒布されたる文字は卽ち左の二十八字であつたが、現今に於ては「ㆆㆅㅿ」の三字は使用されてゐない。

子音 ㄱ ㄴ ㄷ ㄹ ㅁ ㅂ ㅅ ㅇ ㅈ ㅊ ㅋ ㅌ ㅍ ㅎ ㆆ ㅿ ㆁ。

母音 ㅏ ㅑ ㅓ ㅕ ㅗ ㅛ ㅜ ㅠ ㅡ ㅣ ㆍ。

而してこゝに縱書の綴字法の一例を示せば、卽ち左の如くであるが、これを俗に本文と稱する。

ㄱ ㄴ ㄷ ㄹ ㅁ ㅂ ㅅ ㅣ ㅇ

가갸 거겨 고교 구규 그기마 과궈

하	파	타	카	차	자	아	사	바	마	라	다	나
햐	퍄	탸	캬	챠	쟈	야	샤	뱌	먀	랴	댜	냐
허	퍼	터	커	처	저	어	서	버	머	러	더	너
혀	펴	텨	켜	쳐	져	여	셔	벼	며	려	뎌	녀
호	포	토	코	초	조	오	소	보	모	로	도	노
효	표	툐	쿄	쵸	죠	요	쇼	뵤	묘	료	됴	뇨
후	푸	투	쿠	추	주	우	수	부	무	루	두	누
휴	퓨	튜	큐	츄	쥬	유	슈	뷰	뮤	류	듀	뉴
흐	프	트	크	츠	즈	으	스	브	므	르	드	느
히	피	티	키	치	지	이	시	비	미	리	디	니
흐	픈	튼	큰	춘	준	은	슨	븐	믄	른	든	는
화	퐈	퇘	콰	촤	좌	와	솨	봐	뫄	롸	돠	놔
훠	풔	퉈	쿼	춰	줘	워	숴	붜	뭐	뤄	둬	눠

十月

三日

古へより十月三日を開天日と云つて、一般に於て大に崇尚するが、この日大倧教では、大祭を行ふのである。開天日とは、朝鮮神話により、國祖の天降を記念すると共に、農功の終了を機會として、天神たる國祖に報謝の誠を表する、名日である。古來朝鮮には方々谷々の家々に於て、十月の初頃或る吉日を選み、新穀を以て酒を造り餅を調理して、敬虔に告祀を行ふ習俗があるが、多くはこの日に於て行はれた。今日も一般民間に於て盛んに行はれる城主祭又は農功祭等もこの類である。近來壇君の宗教的重光を機會として、此日を更に開天節と稱することになつた。

古代朝鮮民族の間には、氏姓と教政の起原を天帝に歸し、太古に天帝の子が人間界に降臨し、教化を布いたのが我が建國の發端であると傳信されてゐた。故にそれ等の信念的歴史に

於ては、人間界から見る建國なるものが、天界の方から言つて「開天」を意味するのであつて、卽ち天門の人間界に向つて開かれたのを、國家の發生だと信じられたのであつた。かゝる建國神話は、白山・黑水・瀚海の間に生棄せる、一般民衆に普遍されてゐるところであるが、天子降臨の聖地は、東方の靈場たる太白山となつてゐる。朝鮮神話に桓國庶子桓雄が、人間を弘益せんとして、天符三箇を持ち、神衆三千を率ひて、太白山頂に降臨せられ、人間界の三百六十餘事を施したと云つてゐる、これが卽ちその一典型である。又これと同一なる傳統を有する滿洲民族を以て、興起せる金國が、大定十二年に長白山神を封じて興國靈應王となし、明昌三年十月に復冊して開天宏聖帝としたのも、亦この信念の端的なる一表現であつて、開天といふ文字を公式に用ゐた一例にもなるのである。

然らば開天節を十月としたのは何故か。蓋しこれは農功の終つた時を以て歲首としたる古俗に由つたのであらう。後漢書には「鏤頞常以歲十月祭天、晝夜飲酒歌舞、名爲舞天、其作樂大抵與夫餘國同」とあり、又「高句麗祠社稷零星以十月祭天大會名曰東盟」とある。三國誌には「馬韓以五月下種訖祭鬼神群聚歌舞十月農功畢亦復如之」とあり、又「高句麗其俗於

居所之左右立大屋祭鬼神其國東有大穴名隧穴（久庵地理に依れば、これは平北寧邊の螺龍窟のことであるらしい）、十月國中大會迎隧神還於國東上祭之置木隧於神坐」とある。又新唐書には「高麗國左隧穴每十月王自祭之」とある。これ等の文獻から推しても、これが古風であることは窺はれるであらう。古來十月を上月（상（サン）달（タル））と云つてゐるのも、その民俗的遺物であることは多言を要するまでもない。而して文化的同源關係にある日本に於て、十月を「カミナヅキ」、卽ち神に關係される月と云つて、種々の神事がこの月に行はれ、支那の東海岸一帶に於ても、亦皆十月を以て祭りの月となし、特に東夷の故土ともいふべき山東地方に於て、十月を神事的に崇尙してゐるが、これ等のことから見ても、その由來の久しきを知り得るであらう。

二十日

十月二十日には、年例として大風が起ると傳へられてゐるが、是日の風を俗に孫돌風（朝鮮語で손돌바람（ソンドルパラム）「Sondol param」）と稱する。昔、高麗の王が船で江華に幸啓された時、船

の險所に差し掛るのを見て、王は船人孫乭なる者を疑ひ、命じてこれを斬らしめ、幸にその危險を免れたので、その難所を孫乭頭（손돌목「Sondol Mok」）といつた。それでこの日には孫乭の怨みで、大風が起るといふ說が傳へられ、江華島の人々はこの日に船を出さないといふ。

城主祭

十月を上月（상달）と云つて、都鄉といはず、各家では年例に依り、月内の吉日を選み、新穀を以て餅を搗き、酒を醸して、家宅の神に祭を行ひ、一家の平穩無事を祈るのであるが、その吉日とは午の日に相當する。殊に戊午の日を最吉日としてゐるが、家に依つては、安宅と云つて、巫を用ゐて神祀を盛大に行ふ

（城主ブリ）

こともある。俗にこれを城主바지꾹(Sung Chupachikut)、又は城主푸리(Sung Chu puri)とも云つてゐる。家宅を統轄する神の名を城主、又は成造と稱するが、この祭は神道の遺風である。神檀實記の大倧敎編に依れば、「人民の家々では、毎年の十月農事の終つた時に、新穀を以て大甑餅を蒸し、酒果を加へて、賽神するのを、成造祭と云ふが、成造とは卽ち邦家を成造したこの意義である。壇君が始め人民の居處する制度を敎へて、宮室を造らしめたが、人民はそれを永遠に記念する爲め、必ず降壇月を以て神功を報賽するのである」と記されてある。

農功祭

咸鏡道の各地方では、十月の一日より末日に至るまでの間に、農功祭が行はれる。この祭は朝鮮の國祖たる壇君に、新穀を差上げる祭であるが、各部落では、月内の吉日を選み、新穀を以て、餅や酒を調理して、全家族全部落を擧げ、心ゆくまで盛大に祭を執り行ふ。そしてこの祭がすむまでは、如何なる事情があつても、新穀の出入をすることなく、又牛馬等の

動物に至るまで、過酷な取扱を避け、凡てのことに出來得る限りの謹慎を表するのである。又祭りに供へた御馳走は、全部落民が集まつて、戴くことになつてゐるが、昔からこの祭りに供せられた飲食物は、幾ら多く食べても、腹を痛めることがないと傳へられてゐる。これは上古時代の十月祭天の遺風である。

墓祭

十月中には、種々の供物を調理して、各自家の祖先の墳墓に參り祭を行ふが、これを時祀と稱する。正月の正朝茶禮の部に述べたるが如く、家廟に於ては四代祖までの祖先を祭り、五代祖以上には家祭を廢するが、墓祭は始祖以下の各祖先の墳墓に、悉くこれを行ふことになつて

（農功祭）

る。遠代の名高い祖先の墓には、その子孫數百人集まり、頗る盛大なる祭が執り行はれるが、その後孫たるものといへども、喪中の人と女子はこれに參加しない。而して祭祀の費用は、多くは祭田又は慰士といふ土地が墳墓の近き所にあつて、それより生ずる收入を以て之に充當するのである。その土地は一族の共有とし、門契又は宗契に於て之を管理することになつてゐる。

（墓　祭）

漬物の調理

漬物を漬けることを、朝鮮語で김장（Kim chang）と云ふ。年々十月になれば、都鄉といはず、各家々では冬の用意として、大根と白菜で各種の漬物をこしらへるのであるが、夏の醬油造りと十月の漬物は、一年

中の大仕事になつてゐる。女子の間では、十月の挨拶として「キムチヤンを終つたか」といふ、御世辭を述べるのである。この一事から推しても、各家が漬物を如何に重要視してゐるかを窺ひ知らるゝであらう。都會地の市場では、月内の最も主要なる商品として、大根や白菜を山積して置き、又之を買ひ求むる男女の客が雲集して、市場は一大盛況を呈するのである。

（漬物の調理）

漬物には沉菜（김치 Kim Chi）・깍두기（Kak duki）・冬沉（동침이 Tong Chimi）・醬沉菜（장김치 Chang Kimchi）鹽沉菜（짠김치 Chan KimChi）の種類があつて、これらの漬上げには、大根や白菜を主とする外、鹽・唐辛・芹・葱・松の實・栗・

梨・石花(牡蠣)・生薑・蒜・蝦鹽漬の汁、又は石首魚鹽漬の汁、或は煎子鹽漬の汁、等が用ゐられる。

乾釘

これは一種の菓子で、これを강정(カンジョン)(Kang Chung)と云ひ、月内によく造つて食べるのであるが、吉宴又は祭祀にも多く用ゐられる。これを造るには、糯米の粉に小量の水と酒を掛け、揑ねた上で、二寸又は三寸の方形に切り、之を乾かして油で揚げると、膨れて恰も繭のやうになる。之れに水飴をかけて、白・黑の胡麻と青黄の大豆粉を粘付するのである。

又この外に、大豆乾釘・胡麻乾釘・松實乾釘・五色乾釘・梅花乾釘等がある。即ち大豆又は大豆の粉を飴に雜じて造りたるものを、大豆乾釘(콩강정(コンカンチョン) Kong kang Chung)と云ひ、飴に胡麻を混じて造りたるものを、胡麻乾釘(깨강정(カエカンジョン) Kai Kang Chung)と云ひ、松の實を飴に混じて造りたるものを、松の實乾釘(잣강정(チャッカンジョン) Jat Kang Chung)と云ひ、五種の色を付けたるものを五色乾釘と云ひ、糯稻を炒つて、花瓣の形と爲し、これを飴に着けたるも

のを梅花乾釘と云ふ。

艾湯と艾團子

これは初冬の料理としては、美味であり、而も亦上品なものである。艾の嫩芽を採つて、牛肉と鶏肉とを混じ、羹を作つたものを艾湯といひ、又艾を搗き糯米の粉と混じて餻を造り、黄粉と蜜とを和したるものを艾團子と云ふ。

牛乳酪の製造

昔は内醫院で、牛乳酪を造り、これを宮中に獻納することになつてゐたが、その期間は十月一日に始まり、翌年の一月に至つて止むのであつた。又耆老所では、十月から牛酪を製造して、老齢の臣僚に分與するのが例であつたが、通例翌年正月の上元日、即ち十五日までとし、その後はこれを行はなかつた。

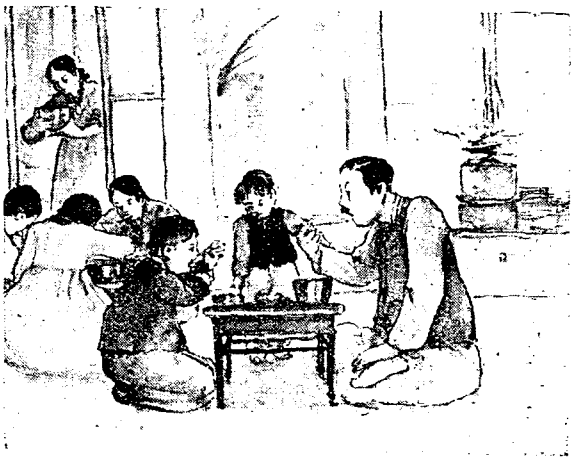
十一月

冬至

一　赤小豆の粥　冬至の日は千歳暦に定められてある日で、新暦の十二月二十二日に當るのである。俗に冬至を亞歳と云ひ、年々この日になると、都鄙を問はず、各家々では赤小豆の粥を造り、家廟に祭を行ひ、之を喰べるのであるが、この赤小豆の粥の中には、必ず糯米の粉で卵のやうな團子を作つて入れることになつてゐる。昔は厄拂と云つて、赤小豆の粥を、家の入口又は門扉等に振りかける習俗もあつたが、今では廢れてしまつた。恐らくこれは支那から傳はつたものであらう。荊楚歳時記に依れば「共工氏に不肖の子があつて、冬至の日に死して疫病の鬼となつたが、この鬼は赤小豆を怖れたから、冬至の日に粥を造り、以て惡魔の追拂ひをする」と記されてある。

二　暦の頒賜と煎藥　冬至の日には、年例に依つて觀象監（天文・地理・暦書等を掌る

官署）から、翌年の曆を作つて之を獻納し、宮中では、それに玉璽を捺して百官に頒ち賜はつたのである。その表裝は黄と白の二種であつた。各司の吏屬は、冬至の贈物として、曆を其の親類や知人に贈つたが、殊に吏曹の屬吏は、各地の守令に青い表裝の物を贈るのが例であつた。蔡濟恭の樊岩集を按ずるに、



（冬至日の赤小豆粥）

冬至日頒曆と題したる詩に、「曆日煌々降紫清、驚疑忽復念前生。如何萬死江潭客、猶世奎章學士名。」とある。

又內醫院では、この日、煎藥を製造して、宮中に獻納するのであつたが、これは牛の足と皮とを煮て膏と爲し、白蜜・丁香・桂心・清蜜等を混じて造つたものである。しかしこれらの風習

は、今は全く過去のこゝとなつてしまつた。

黃柑製

年々冬至の季節になると、濟州島からそこの特產品たる橘・黃柑(蜜柑)等の果物を獻上したのであるが、宮中に於ては、先づ之を大廟に供へられ、後侍臣に頒ち賜はり、又島人に對しては遠來を慰め、御馳走された上、布帛等の下賜品があつたのである。何しろ遠き海中の孤島から王化を慕つて來るのであるから、吉例を設けて科(高等官資格試驗のこと)を行ひ、成績を考試して、優秀な者には、特に資格を與へられたのであるが、これを名づけて柑製と云つた。新羅時代には、耽羅の星主(昔は濟州島を耽羅國と稱し、王を星主と云つた)から、柑橘類の土產を貢納すると、その御祝として科を設けることあつたが、李朝に於てもこれを襲用してゐた。しかし今は、既に昔のこゝとなつてしまつたので、見るにも見られぬやうになつた。

十二月

一日

昔は年々十二月の一日になると、年例に依つて、吏曹から朝官の成績を考査して、國王に上啓するのであつたが、これを歳抄と云つた。これは官吏の成績を上奏するこゝで、六月の一日と十二月の一日に行はれたのである。その點表に依つて、叙用・陞等・或は減等・罷免……等が行はれるのであつた。

國家に慶事あつて、大赦の行はれる時には、別歳抄として行はれたのである。

臘日

一 臘享 冬至の日から、第三番目に當る未の日を臘日と定められ、この日には廟・社に大享祀を行ひ、これを臘享といつた。蓋しこれは夫餘の「迎鼓」祭の遺風であらう。而し

て李時光の芝峯類說に依れば、「蔡邕の說を引用して、青帝(東)は未日・赤帝(南)は戌日・白帝(西)は丑日・黑帝(北)は辰日を以て、臘としてゐるが、朝鮮は東方に位し、木に屬されてゐるから、未の日を以て臘とした」とある。

二　雀捕　臘の日に雀を食へば、榮養になると云ひ、又小兒に食はせると、惡い瘡瘡に罹らないと云つてゐる。又この日に獲つた禽獸の肉は、特に味がをいしいとの說が傳へられ、京鄕の別なく、網を張り、或は小銃を放ち、盛んに雀を捕へて食べるのである。京城市中では、銃を放すことを嚴禁されてゐたが、この日に限つて、獵銃の使用を特に默許されたのであつた。

三　臘日の雪　臘の日に降つた雪は藥になるといふ說が傳へられ、この日に雪が降れば、清き部分を取り、これを溶かして土瓶に入れて置く、それを漬物に使用せば、蛆(うじ)が出來ないで、味が變らず、又衣服や書籍に灑けば、蟲が來ないとも云つてゐる。

四　臘藥　昔は臘の日になると、內醫院から種々の丸藥を製造して、獻納するのが例であり、これを各侍臣に、頒賜されたものである。製藥の主なるものは、淸心丸・蘇合丸・安

神丸等で、清心丸は消化不良に、蘇合丸は瘧亂の病に、安神丸は熱病に用ゐられるもので、正宗時代には、新に濟衆丹・廣濟丸の二種を製造せしめ、各營門の軍隊に頒賜されてゐたが、その効果は蘇合丸に勝るといふので、聖德に感激した者が多かつたこのこゝである。

耆老所からは、藥劑を精製して、老臣及び各司に分與したのであるが、それは知人間の贈答品にも用ゐられた。

大晦日

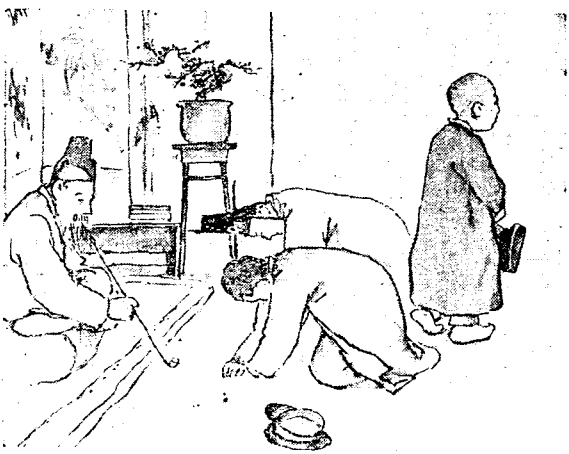
十二月の末日を俗に大晦日といひ、是日の夜を除夜と云ふが、この日は一年中の最終の日なので、年中の取引關係は、大清算を行ふ日である。各家ではお正月の準備や債權の取立、債務の返濟等で緊張裡に奔走する。夜中までも債權の督促に廻るものもあるが、夜の十二時が過ぎると、正月の上旬までは、決して請求しないのが例である。

一　舊歲拜　この日の夜、中流以上の家では家廟に禮拜を爲し、年少者は尊屬の親戚又は知人間の長者を歷訪して年終の挨拶をするのである。これを舊歲拜と稱する。是日の夜は都

鄉の別なく、薄暮から夜遲くまで、廻禮者が往來し、街上に提燈の絶へ間がなく、街巷は非常に賑かである。

昔はこの日、在京の二品以上の諸官や侍臣は、參內して、舊歲の問安を行つたのである。

二　守歲　この日の夜には、貧富貴賤を問はず、津々浦々の家々で、屋內外の隅々に燈火を點ずに、密かに白粉をつけて呼び起し、鏡を見せて大笑することもあるのである。



（舊歲拜）

るのである。男女老幼共に鷄鳴に達する頃まで、睡眠しないで夜を徹する、これを守歲といふ。この夜睡れば、眉毛が皆白くなるといふ說が傳へられ、小供等は、全く眠ないで、夜を明かすことが往々あり、又寐た者の眉毛

東京夢華錄に依れば、「都城の人は毎年の除夜になると、竈の裏に燈火を點ずる習例がある。それは大晦日に、竈神は家人の罪狀一切を、天神に密告するといふ說から、この夜に限つて竈の裏を明くして、それに敬意を表するのであるが、一方には神の出入を監視する意味も含まれてゐる。而して家の人々は、火

(守歲)

爐の傍に圍坐して曉に至るまで眠ないのであるが、これを守歲と稱へる」と云つてゐる。又溫革碎瑣錄には「除夜になると、神佛の前・房の內外・屋內の隅々、何れの處にも燈火を點じ、一家をして明くせしむる」とあり、東坡記の蜀俗篇には、「大晦日は酒宴を支度し、友人を招ねき、宴飲を張るが、これを別歲と

云ひ、曉まで眠ないで、夜を明かすのであるが、これを守歳と云ふ」とある。

而して昔日の文人志士の送年感は如何であつたか、こゝに二三の送年詩を擧げて見やう。

李朝端宗時代の節臣、死六臣の一人たる李塏の除夕詩には、

歳律今垂盡、端坐赴鑿蛇。呼兒數更漏、喚婦落燈花。永夜雲陰積、嚴風雪勢斜。清談仍促酒、不必阿戎家。

とあり、仁祖時代の節臣、三學士の一人たる尹集（號林溪）の除夜詩には、

半壁殘燈照不眠、深夜虛館思凄然。萱堂定省今安否、鶴髮明朝又一年。

とあり、仁祖時代の文士孫必大（號寒齋）の守歳詩には、

寒齋孤燈坐侵晨、儀龍殘年暗傷神。恰似江南爲客日、夕陽亭畔送佳人。

とある。又大晦日のことに就いて、古へより廣く歌はれてゐる歌謠に、

十二月なりや　大晦日
今年も　もはやけふ限り
年は暮れ　人は老ゆ

命の涯も　かくあらん
東白みて　鶏鳴けば
はや一年は　夢と消え
春の光りに　驚いて
萬象　眠り覺すなり
春は　再び還れども
父母は　永久に歸へらぬを
人よ忘るな　心せよ
及ばぬ悔ひを　殘すまじ
人生の命は　露に似て
無情や　歳月矢の如し

といふものがある。

三　驅　儺　これは假面をして、惡鬼拂ひをすることである。昔し醫藥の發達せざりし時

代に於ては、一身の病魔を退治し、或は年末の災厄を拂ふに、これが一般民衆の信仰の的であつた。又宮中に於ては、一つの儀式として行はれてゐた。卽ち年々大晦日になると、宮庭に於て觀象監主宰の下に、色々な假面をして、大砲を放ち、鼓・銅鑼などを鳴らしながら、惡鬼拂ひをするのであつたが、これを驅儺と云つた。

儺の由來に就ては、種々の說が傳へられてゐるが、これ元來支那から傳はつた習俗である。ところが外來の儀禮は、固有の民信に滿足を與へられなかつた。それ故支那流の驅儺は、たゞ一の傳例として行はれ、朝鮮在來の疫鬼驅逐方たる處容舞に、佛菩薩の加持力を加へたものが、一大舞樂として更に行はれたのである。慵齋叢話に依れば

處容の舞は、新羅憲康王時代から始まつて居る。神人が海中から出て、始めは開雲浦に現はれ、王都へ入り來たが、その人品は甚だ奇傑であつて、且つ歌舞に優れて居た。益齋の詩に「貝齒紅顏歌夜月、鳶肩紫袖舞春風」とはこれを云ふのであらう。その舞方は、初め一人を用ゐ黑布紗帽をして舞らしむるが、その後には五方の處容がある。世宗時代には、その曲調を以て歌詞に改撰して鳳凰吟と名づけ、遂に廟廷の正樂と爲して居たが、世祖は、

その規模を增し、大樂隊として之れを奏したのである。初めは僧侶の供養を做ひ、群妓は齊しく靈山會相を（音樂の曲名）唱ふ。佛菩薩は、外庭から入來り、伶人は各々樂器を手にして居るが、雙鶴は五人、假面の處容は十人である。彼等は皆行列を爲して歩きながら三唱をする。そして皆定席に就き太鼓を打ち鳴らし、伶妓等は體を搖がし足を動かすが、暫くして之れを罷める。茲に於て蓮花坮戯を作るが、先きに香山池塘を設け遍く彩花を挿み（其高さ一丈に餘る）左右には又諸燈籠を吊したので、流蘇（旗首に附けるもの）がその間に映つて居る。池の前の東西方に大蓮蕚を置きて居るが、小妓は、その中へ入りて歩虛子（唱詞の名）を奏ずる。雙鶴は、奏曲に從つて翺翔こ舞ひながら就て蓮蕚を啄く。雙小妓は、蓮蕚を排し出て或は相向ひ、或は相背きて跳ねながら蹈る。所謂勳々こは是れを謂ふのである。茲に於て雙鶴は退き處容が入る。初め慢機を奏するこ、處容は列をして立ち鬱袖を揮ひて舞ふ。次に中機を奏するこ、處容五人は、各々五方に分立して舞ふ。又促機を奏するこ、神房曲を唱ひながら蹈る。終に北殿に於て奏樂すれば、處容は、退きて席に就く、又一人の妓あつて南無阿彌陀佛を唱ふこ、群は從ひて之れに和する、又觀音讃

を三唱して退出する。毎年の除夜には、昌德、昌慶兩宮庭に入り、昌慶に於ては妓樂を昌德に於ては歌童を用ゐて、翌日の曉まで樂を奏する、仍つて邪鬼を驅逐する。とある。而して處容の由來に就ては、正月十四日、處容俗の條を參照されたい。

歲饌

十二月には、古來都鄕といはず、御歲暮として、雉・果物・菓子・鷄卵・肉物・魚物等を、親戚又は知人の間に、贈答することが一般に行はれる。これを歲饌と云ふ。

昔は歲末に、各節度使を始め、各道伯及び守令等から、朝家の高官又は親知等に、歲饌として土產を贈るの例があつた。書面の中に別箋を添付し、土產の種目を列記するのであつたが、それを俗に聰明紙と云つた。

京城附近の七十歲以上の朝官・命婦には、歲末に宮中から歲饌と云つて、米穀や魚類などを賜はり、地方に於ては守令などの地方官から、これを授與するのであつた。又八十歲以上の朝官及び九十歲以上の士庶人に對しては、加資をしたのであるが、加資とは日本の叙位と

同じて、百歳以上の者には尙ほ一品を超へて加へたのである。これは皆老人を優遇する意味であつた。しかしこれは旣に夢の如き過去のこゝとなつてしまつた。

牛禁を弛む

昔は大晦日の二三日前から、牛禁を弛めるの例があつた。牛禁・酒禁・松禁は、李朝の初葉から三大禁としてあつたが、牛禁とは人民が猥りに牛を屠殺するこの理由から、法令を以て牛の屠殺を制限したのである。然るに一般人民の正朝を豐富ならしむるこの趣意から、年末に限つて法令の適用を緩かにしたのである。この俗も亦李朝末葉以前のことである。

祠堂神

昔、慶南の高城では、毎月二回づつ、官から郡の祠堂を祭つた。卽ち十二月二十日後になると、綵緞を以て神を假裝し、邑人は、神前の舞蹈を行ひ、又神裝を奉じて、官衙を始め邑

村を廻つたのであるが、婦女子供達は爭つて米穀金錢等の寢神を爲し、正月の十五日に至つて、元の祠堂に奉還したのである。今日も慶尙道の地方では、お正月に「地神踏み」といふ遊戯が行はれてゐるが、蓋しこの類であらう。

閏月

閏月は餘計の月なので、厄のない月とされ、民間では婚禮や家屋の建築及修繕等が多く行はれる。

又この月内には、壽衣の裁縫などをするが、壽衣とは殮襲用の衣服で、死後に用ゐられる衣服である。朝鮮の習俗に、中流以上の家庭では、老年の親の爲めに、壽衣と云つて死後着用の衣類を、豫め支度するのが例となつてゐる。この月には何事をしても忌避する所がないとのことから、すべてに閏月を利用することになつてゐる。

閏月の供佛は特に佛に喜ばれると傳へられて、この月には、寺參りの婦女子が多く、寺刹は爲に雜沓する。

——（了）——　（一九三〇、一〇稿）

昭和六年三月十八日 印刷
昭和六年三月二十二日 發行
昭和六年七月二十日 再版發行

朝鮮總督府

京城府遂來町三ノ六二
印刷所 朝鮮印刷株式會社

京城
群書堂書店

國會圖書館藏
1961.5.9